水無瀬家因果と居候

白羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水無瀬家因果と居候

【Ｎコード】
Ｎ８７２１Ｓ

【作者名】
白羽

【あらすじ】
水無瀬（みなせけ）家と、その家の居候（いそうろう）のまわりで起こる、様々な心霊現象。
水無瀬家を縛る因果と、ちょっと変な居候の物語。

＃０１　双子のお守り　陽（前書き）

※この作品は、短編小説「双子のお守り」と同一作品です

#01　双子のお守り　陽

私の家は、人の出入りが多い。
現代では割と珍しい、家族ぐるみの近所付き合いが多いからなのかもしれない。
今日も、中庭では祖父と近所のおじいさんが、縁側では妹とその友人達が談笑している。

彼らとの挨拶もそこそこに、私は足早に玄関へと向かう。
そして、扉を開こうとした次の瞬間、それは突然開き、中から無精ひげを生やした甚平(じんべい)姿の男がのっぺりと現れた。
「おかえり」
我が家の居候(いそうろう)だ。
寝起きなのか、ダルそうに中庭を横切っていく。

私は、この男が苦手だ。
どこがどうということではない。
生理的というか、この男の全てに嫌悪感を感じるのだ。

祖父に呼び止められ、彼は老人の輪に混ざった。

なぜか彼は、祖父に気に入られている。
いや、祖父だけではなく、下の妹もすっかり彼に懐いている。
あの男のどこに魅力があるのだろう。
私は彼に、一応恩があるのだが、やっぱり好きになれないでいた。

ジマジマと彼を観察していると、縁側の妹達の会話が耳に入ってきた。
「小人が部屋に住んでる？」

「うん。サエちゃんなら、アレが何なのか分かるかなって思って」
唐突に飛び込んできた、なんともメルヘンチックな会話。
私の興味が、あの男から妹達の会話へと移った。

ウチの妹達には霊感がある。
上の妹はそれが認められて、近所の神社で巫女さんの真似事をさせられてるし、下の妹もそれなりに騒動を巻き起こす。

私は…。
あの一件以外は、特に霊との関わりを持った事がない。
その一件も、半分夢見心地だったわけだし…。

「小人ねぇ」
細く高い会話の中に、低く汚い声が混じりこんだ。
見てみると、彼が女子中学生の輪の中に混じり込んでいた。
ギョッとして驚いている友人達を尻目に、彼は顎(あご)に手を当て「う〜ん」と考え込んでいる。

「色んな小人の話を聞くけど、小人ってのはロクなヤツがいないんだよなぁ」
「えっ？」と、相談した本人が呟(つぶや)く。
「絵本の世界では、妖精や小人は主人公を助ける良きサポータとして描かれているけど、現実の体験談だと、不幸をもたらしたり、邪悪なものが多かったりするのさ」

場の空気が変わる。
相談者も不安そうにしている。
あ！空気読めないって、こういうことを言うんだ！と、私は自分の中で納得した。

しばらくの沈黙の後。
「よし！任せろ」と、ニカッと笑いながら言うと、乱暴に靴を脱ぎ、縁側から屋内に入っていった。
残された妹は、驚いている友人をフォローしながらも、彼を信頼しているのだろう。
「大丈夫」と、しきりに繰り返している。
やがて奥から母を呼ぶ声が聞こえ、なにやら話し込んだかと思うと、
「三日、俺にくれ」と言いだした。
相談した彼女は、「はあ」と答えるしかないようだった。

夕食後、家族が談笑する中、彼は縫い物を始めた。
慣れない手つきで、見てて危なっかしい。
談笑していた家族も口数が減り、だんだん彼の裁縫技術に目が釘付けとなる。
もちろん、悪い意味で。
母と祖母にいたっては、代わりに縫ってあげようかしらとばかりの表情だ。
「お構いなく」との彼の一言で家族は談笑に戻ったが、結局、皆彼が心配のようでチラチラ様子をうかがっていた。

二日後、彼はそれを完成させた。

幸い、指には絆創膏が巻かれていなかった。
「血が入るとマズいんだ」と彼は言っていたが、ならばなおさら、母に任せた方が良かったんじゃないかと思ったが、口にはしなかった。
「これで仕上げ」
彼はそう言うと、自分の髪の毛を二本抜き、それぞれに一本づつ入れ込んだ。

その日の夕方、妹とその友人に連れられ、例の相談者がやってきた。
気のせいか、少しやつれているようだった。
「おうおう、いい具合になっちゃって。
もしかして、何かチョカイでも出しちゃたか？」
彼は、嬉しそうに彼女を迎え入れる。
「…」
彼女は、今にも泣きそうな表情で、頭を縦に振った。

いつの間にか、机の引き出しに住み着いていた小人。
父、母、子供の三人家族らしい。

今までは恐ろしくて、見て見ぬ振りをしていた彼女。
三日前のあの日、あの変人に不幸を招くと言われ、それがどうしても信じられず、とうとう行動を起こしてしまったらしい。

「初めまして、じゃないよね。こんにちは、小人さん」

はにかみながら挨拶をし、手を差し出す彼女。
驚く小人達。
しばらく、小人と彼女との間に沈黙が流れる。
しかし小人達は、三匹で何事か話し合った後、ニタリと笑ってどこかに行ってしまったそうだ。
彼女は、その笑顔に何か嫌な予感を憶えながらも、大丈夫と自分に言い聞かせ、その日は眠ったらしい。

そして、次の日から家族も小人を見るようになった。

それも頻繁に。

引き出しを開けるごとに飛び出してくる小人に、だんだん彼女一家は憔悴していったという。

彼は、その話を目を瞑(つむ)ってふんふんと聞いていた。

「私のせいだ」

目に涙を溜め、話をしていた彼女は、とうとう泣き出してしまった。

「小人の事は、前から家族に話していたのか？」

彼女は頷(うなず)いた。

「そっか」と、彼は鼻から息をふき出すと、三日かけて作り上げた例のものを取り出した。

二体の顔の無い人形。

両方とも同じ形で顔がない。

だれもが、禍々(まがまが)しさを感じるようなデザインだ。

「本当は一体で十分だけど、案外裁縫が楽しくて、もう一体作っちゃた」

はにかみながら、そう言う彼。

可愛くない。

「こっちがオスで、こっちがメスだ。ま、双子ちゃんだな」

そう言いながら、オスと言った方を彼女に差し出す。

「ま、お守りと思って持っときな」

藁(わら)をもすがる想いなのだろう。

彼女は、お礼を言いソレを受け取ると、カバンに大事にしまい込んだ。

もう一つの人形のほうをどうするのかなと思っていたら、

「ほい、こっちは可愛いサエちゃんにな」

といって、妹に差し出していた。
私の視線に気付き焦ったのか、
「マナちゃんは可愛いというか、綺麗な感じだし。
人を寄せ付けないって言うか・・・もちろん良い意味でだよ。
サエちゃんは、ほっとけないと言うか何というか」
などと、しどろもどろに弁明めいたことを言っていたが、私は「ロリコン」と心の中で呟いた。

相談者が帰った後、遠い目をしている彼に話を聞いた。
「まあ、妄想や創作もあるだろうな」
少しづつ暗くなっていく空を眺めながら、彼は呟いた。
「今更ですけど、小人＝悪意って、本当ですか？」
「俺も、話に聞いただけさ。小人の解釈にも、よるんじゃないか？
小人に羽を付けたら妖精だ。青い光を纏(まと)ってれば精霊か？
妖精はどっち付かずな印象だけど、精霊は良い者とされているわけだし」
どうも的を射ない解答だ。
「そもそも、彼女が見たのは小人だったのかねえ」
何を言っているんだ、この人は。
「そんなことといったら、大前提が崩れるじゃないですか」
「何か、胡散臭いんだよな。あの子の話、聞いてると」
「彼女が嘘を付いてるって事？でも、家族も見たらしいし、それは無いんじゃないですか」
「…まあ、そうだな」と、彼は頭を掻いた。
「何故、小人は現れたのか…」
彼はそう呟くと、どこかに出かけていったきり、その日は帰ってこなかった。

次の日の夕方、例の相談者がやってきた。
血相を変えて。

彼女はあいつを見つけると、「どういうことなんですか！？」と詰め寄った。
「どういう事って何が？」
とぼけた顔をして、酢コンブをくわえている彼。
「だって…だって…」
そこまで言うと、彼女は泣きながら崩れ落ちた。

あの後、家に帰った彼女は、自分の机に人形を置き、家族と夕飯を食べていた。
そして戻ってみると、人形は机の上にはなくタンスの上に移動していたそうだ。

私は、それを聞いた瞬間、「呪いのアイテム」という言葉が頭に浮かび、彼を見たが、彼の表情に変化はない。

「気味が悪かったから、そのままにしといたんですけど…」

彼女が、自分の机で勉強をしていた時に事は起こった。

背後にあるタンスから、何やら音がする。
何かが、内側からタンスを押し開いているような音。
恐る恐る振り返ると、例の小人がタンスから這い出る所だった。

と、次の瞬間。

ガブッ！！

あの人形が、小人の喉元に噛み付いていた。
顔が無いはずなのに。
小人は、悲鳴を上げようとするが、声にならない。
もがき苦しみながらも、胸元から何かを取り出そうとする小人。
だが、人形は体を押し付け、取り出すのをブロックする。
やがて、小人は視点が定まらなくなり、血混じりの泡を噴き動かなくなった。
それでも、容赦なく喰らい続ける人形。
後に残されたのは、血溜りと、口の部分が裂けた人形だけだったという。

口を覆い、嗚咽に堪えながら語る彼女は、とても嘘を言ってるようには見えなかった。
まるで楽しみながら小人を追い詰める人形の姿と、骨を噛み砕く音がまだ耳に残ってるのだという。

そんな彼女に、同情も容赦もなく彼は質問を浴びせかける。
「どいつだ？どいつを喰った？」
「…子供…です」
「よっし！」
拳を上に突き上げ歓喜する彼。
私の拳が右頬に突き刺さり悶絶する彼。

「胸元から取り出そうとしたもの、何だったと思う？」
右頬をおさえながら、彼は彼女に真面目に聞いた。
「見ただろ、君は」
青ざめた顔で、ゆっくりうなずく。
「おそらくは得物だ。何故、得物を持ってたんだろうね」

確かに、変だ。

一つ屋根の下に変な男が住んでいる私でさえ、持ち歩いてるのは防犯ブザーくらいだ。
よほどの事が無い限り、武器など持ち歩かない。
持ち歩いていたとするならば、恐らく…。

「だが、ここで疑問が残る。
なぜ、悪意を持っているにも関わらず、君と君の家族に危害を加えて無いんだろうか」

さらに、自論を掲げた。
「小人イコール悪意の象徴だと仮定しよう。
ならば、誰の悪意なんだろう。
ある日、突然に現れた理不尽という名の悪魔？
誰かを恨んでいる誰かの呪い？そこらへんを漂っている悪意？悪霊とか？
そもそも、驚かす事が悪意なのだろうか？
いや、違う。悪意の矛先は違う場所に向いている。
では、その悪意を向けられるべき相手は誰だったのだろう」

雄弁に語る彼の姿は、さながら刑事ドラマの主人公のようだ。
良く咬まないなと、要らぬ所で感心する。

一息整えると、彼は眉をひそめ彼女に近付き、こう言った。
「君は、何か隠し事をしてるね」
彼女は、詰め寄られ目を伏せる。

彼女の答えを聞く間もなく、彼は一冊の本を取り出した。
白い表紙に、シンプルな英表記。
名は【ウナ　カンパーナ】。

「この本は、海外で出版された本を日本語訳したモノなのさ。
自費出版で出回ってる数は少ない」
よく見ると、小さな文字で箒星と書かれていた。
どうやら翻訳者の名前らしい。

「書いてあるのは、ある本の訳を、翻訳者の見解を混じえて書いてある珍しいモノ。
中には、珍しいまじないやジンクス等も書かれてたりもする」
いぶかしげな顔で本をパラパラ捲り、時々手を止め、おまじないらしき記述を見せてくる。

やがて、目的のページを見つけたのか、手で織り目をつけ、こちらに大きく見開いた。
「望みを叶える兄妹の精霊。
だが、望むモノは選べない。夢、心に潜む願望」
その言葉を聞き、彼女は俯き涙を浮かべる。

たしかに、女の子が好きそうな話だ。
同年代の女の子達は、きっと興味をしめすだろう。

さらに続きを読む。
「表側の望みを叶えてくれるのは兄、ヘンゼル。
心に潜む願いを叶えるのは妹、グレーテル」
その一文の横には、羽が生えた可愛い兄妹のイラストが書かれている。

「初めて小人を見た時、君はさぞ嬉しかっただろう。
見た目は想像したものとは違ったが、どう見てもオスだったんだからね」

ヘンゼルと書かれた、可愛い男の子の方を指さす。

「望みを叶える精霊ヘンゼル。
でも君は、本当にヘンゼルなのか、確信が持てないでいた。
そこで君は、安心材料を得るためサエちゃんに相談することにする。
だが、俺のあの一言で、君は不安にかられてしまった。
もしかしたら、自分が呼び出してしまったのは、グレーテルなのかもしれない」

結論ありきの相談だったわけだ。
でも、求めた答えが得られず、彼女は動揺し、小人に話しかけるという行動にいたったという訳か。

「さらに、予想外のことが起こった。
君が、彼らと接触したことによって、望みが羽化(うか)してしまった。
結果、今まで自分にしか見えなかったモノが、他人にも見えるようになってしまった」

「羽化？」
聞きなれない言葉に、思わず言葉が出ていた。

「まあ、思いの力が強くなったってことさ。
彼女が話すことによって、その力は他の人を巻きこんでいく。
集団催眠と言ったほうが、いいのかもしれない。」

話を聞くとかかる、集団催眠…。

「そして、両親が小人を見るようになった。
だが、あの話を聞いた俺達の前には現れない」

たしかに、私達の前には現れていない。
サエでさえも気付いてないという事は、本当にいないのだろう。
しかし、彼女の話を私達も聞いたはず。
集団催眠にかかっていても、おかしくはないはずだ。

「いや、そもそも俺達の前に現れる必要が無かったのさ。
それは、彼女の望みが関係している」

彼女の願い…。

「ところで質問なんだが、君は何故小人をヘンゼルだと思ったんだい？
小人の中には、母親もいたんだろ？」

確かにそうだ。
私も、ずっと思っていた疑問。
彼女は何故、母親もいたのに小人を男だと思ったのだろう。

彼女は、困惑しながら答えた。
「え…、だって、小人は全員同じ顔で…顔が男っぽかったし…。
…え？あれ？……あれ？」
「そう。だったら余計おかしいよね。
なんで、君は同じ顔の三匹を家族と思ったんだろう」

ますます謎が深まり、気味悪さに支配される。

「実は、この【ウナ　カンパーナ】って本、とんでもない悪意に満ちた代物でね。
厄介な嘘が散りばめられているのさ。

まず、この本に書かれたまじないは、八割方が嘘。
そうすれば、よくあるまじない本と認識され、本物として取り扱われない。
もちろん、発行部数が少ないのも、翻訳本として出してるのも計算の内さ。
そして、二割の本物のまじないにも、嘘が散りばめられている。
この兄妹精霊のまじないに関しては、そもそも兄がいるというのが嘘なのさ」

「え！？」
二人同時に声を上げる。

つまり、彼女はあの本に踊らされていたわけだ。

「心に秘めた願望だけを叶える化け物、グレーテル。
その姿は、望んだモノを形取っている」

彼女の秘めた願望とは何なのだろう。
彼は、人差し指を立てる。

「実は、この話で登場してない人物がいる」

一呼吸おき、彼は語りだす。
「君の家族は何人だ？」

ハッとしたように、彼女は顔を上げる。

「実は、彼女には姉がいるのさ。
大学に通うため、都会で一人暮らしをしているんだ。
その姉が、もうすぐ帰ってくる。地元で就職するためにね」

顔が青ざめ、ワナワナと震えはじめる。

「ここで、小人の数が重要になってくる。
彼女一家の人数は4、小人の数は3。
小人の数が、悪意を持った人間の願望だとしたら」

彼女は、体を抱え込むようにして震えている。

「だとするならば、悪意を持った人間と、その矛先は…」

最低だ。
中学生の女の子を、そこまで追い詰める必要があるのだろうか。

堰を切ったように、彼女はむせび泣く。
痛々しげに、声を押し殺して。

「君は、無意識に姉に対するコンプレックスを抱え込んでいたのさ。
常に前を行くお姉ちゃん。美人で、頭良くて、自分には決して追い付くことができない。
でも、姉が遠くの大学に行くことになって離れることにより、最近は心穏やかに暮らしていた。
ところが、どういう訳か地元で就職することになった。
内心、穏やかじゃなかったろうね」

彼女は、ただただ泣き続ける。
無意識とはいえ、自分が実の姉に危害を加えようとした衝撃は、量り知ることは出来ない。
しばらくの間、私は、彼女の震える背中を見つめていることしか出来なかった。

「ほい、酢コンブ」
彼が、小さい長方体の箱から一枚酢コンブを差し出す。
「知ってるか？酢コンブ食べると、頭が良くなるらしいぜ」

聞いたことの無い健康情報だ。
お昼の健康番組のような、胡散臭さを感じる。

「…咀嚼で、脳を活性化させるから？」
意外なことに、その言葉を聞き、彼女はゆっくりと顔を上げる。

コクリと頷き、続ける。
「実は姉ちゃん、もう帰ってきてるのさ」
「え？」

彼女の顔が、驚きの表情へと移り変わる。

「姉ちゃんな、実は、東京で就職に失敗したのさ」
「お姉ちゃんが失敗…」
「まあ、お姉ちゃんも人間ってことさ」

呆然としている彼女に、さらに続ける。

「君が、自分にコンプレックスを持っていたのも知っていた。
だから、実家に住まず、市内で一人暮らしをすることにしたんだ。
君の負担にならないようにね」

そこまで聞くと、全てを悟ったのか、彼女は差し出された酢コンブを震える手で受け取った。
そして、酢コンブを口にふくむと、震える唇で微笑んだ。

「頭良いくせに、テレビで言われた事はすぐ信じちゃうんだから」
目にはみるみる涙が溜まり、大声で泣き続ける。
今度は、堪えることなく。

しばらくの後、妹に抱き支えられる彼女を遠目で見ながら、彼は酢コンブを食べていた。

昨日、私と話した後どこかに出かけていたのは、彼女の家族に会うためだったようだ。
姉にも会い、話を聞いてきたらしい。

「失敗を隠し歯を食いしばって、妹の道標になろうとした姉と、それが逆にコンプレックスになり苦しむ妹か。
つくづく人間って、分かりあえない生き物だな」

彼女の姉も、苦しんでいたようだ。
出来の良い妹を持ち、片意地を張って生きる必要のない自分にとっては、理解出来ようもない話だった。

「苦しかったとおもうよ。弱みを見せないっていうのは」

悲しげに微笑む彼の表情は、今まで見たことのないくらい人間的だった。

「でも、大丈夫さ。
二人とも、心の中では好き同士なんだし」

そう言うと、胸元から口の部分が裂けた、あの人形を取り出した。
そして、口の部分をまさぐると、中から二つの物を取り出した。

ペーパーナイフと白い薔薇。

「愛情と憎悪は、表裏一体って事かな」

私は、この男が嫌いだ。
でも、少しだけ…。
少しだけ…。

#02　黄泉の鏡

秋の始め、まだ続く残暑の中、額の汗を拭いながら彼は私の前に現れた。
「やっと完成したよ。今回は、さすがにしんどかったな」
そう言って畳に腰を下ろすと、私の飲みかけの麦茶を一気にあおった。

嫌悪感に苛(さいな)まれながら、私は彼に聞く。
「また、何か作ったんですか？いい加減、やめて欲しいです」
そうは言うものの、私は彼が作り出す禍々(まがまが)しくも神々(こうごう)しい作品に、心引かれ始めていた。

「よくぞ聞いてくれた。取りい出したるこの鏡。その名も『黄泉(よみ)の鏡』。
…いや…壁と言うべきか…窓？」
ブツブツ独り言をはじめる変人を尻目に、私は取り出された品を凝視する。

紫色の布をかぶせられた、鏡らしきもの。
見た感じ、今までの彼の作品のような禍々しさを感じない。
やはり、布で隠れているからか？と、布に手をかけようとした瞬間、彼は急いで制止した。
「ちょっと待った。この鏡を覗く前に、一つ約束事がある。
それは、必ずもう一枚鏡を用意する事。
そうしなければ、まずいことになる。特に、一般人はね。
キミなら、多分大丈夫だろうけど…まあ、一応ね」
そういうと、似合わないウインクをする。
気色悪い。

私は、カバンから乙女のたしなみである小さな鏡を取り出し、彼にこれでいいかと確認する。
彼は嬉しそうに頷(うなず)き、紫の布に手をかけた。

「では、黄泉の世界にご招待〜」

現れる鏡面。
見えるのは、彼のモノであろう、鏡面に付いた指紋。
そして、後方にある中庭。
空のコップ。
テーブルに置かれた小さな手鏡。

他には…無い。
何も見えない。

黄泉の世界も。
恐ろしい悪霊も。
私自身も。

視界が回る。
世界が廻る。

目の前の鏡に、私の存在が否定される。

私は誰？
私はダレ？
ワタシハダレ？

次の瞬間、目の前にもう一つの鏡面が姿を現し、髪の長い少女が現

れた。

「君はここにいる」

その瞬間、頭の中のまどろみは弾け、現世に回帰する。
冷や汗が止まらない。
まだ心の中に、嫌な不安感が残っている。

「これは何！？」
自分でも驚くほどの声が出ていた。
「だから言ったろ？『黄泉の鏡』。
命名はオレ。へへ」

知らないうちに、張り手が飛んでいた。

「まあ、そう怒るなよ。使い方を間違わなければ、便利な道具だぞ。
一つ、この鏡はこっち側の住民は映さない。
一つ、向こう側の住人は無条件で映し出すことができる。
一つ、その他、霊的な物も映し出すことができる。
まあ、そのかわり危険性もありだ。なはは」

乾いた音がして、彼の両頬にもみじが咲いた。

これは、危険すぎる。

それから私は、その鏡を布でぐるぐる巻きにし、『封』と書いた紙を張った。
ウチには、そういう類（たぐい）のものが結構存在するので、『封』と書いただけでも人避けとしては効果的だ。
砕いて捨てようとも思ったが、その瞬間、得体の知れないものが飛

び出しそうな気がして挫折した。
「賢明だね」
彼は、そう言って笑った。

ふと、彼がどのようにしてアイテムを作っているのか気になった。

彼の額からは、今も汗が流れ続けている。
確かに今日は暑いが、体に汗がにじむ程度だ。
いくら汗っかきでも、そこまで汗をかくものだろうか。
よく見れば、顔も青ざめている。

「冷や汗？」

そう、私が口にした瞬間、彼は笑ったままテーブルに突っ伏した。
ゴンという鈍い大きな音に、様子を見に来る祖父。
彼を見た瞬間、大慌てで救急車を呼ぶ祖父。
なぜか、時報を聞いている祖父。

結局、彼は病院のベッドで目を覚ます事になった。

どうやら鏡を作るのに、自分の血を使ったらしい。
あとちょっとで、失血死だったらしい。
あとちょっとだったのに。

彼が退院して、何故あんなものを作ったか聞いてみた。
すると彼は、
「あったら色々と便利でしょ。特に君の家系は」
と、笑っていった。

たしかに、ウチの家系はそういう人間が多い。

私の妹達も、私自身も・・・。

生物を映さない鏡。
私が目の前のコップを持ち上げたら、鏡の中のコップも持ち上がったのだろうか？
それを口に出すと、
「持ち上がるよ。ポルターガイスト現象だな」
と、彼は答えた。

黄泉の鏡は、むこう側の住民を写し、こちらの住民を否定する。
ならば、普通の鏡はその逆なのだろうか。
だとすると、普通の鏡を見たむこう側の人間は、あの時の私と同じ気持ちになるのだろうか。

「幽霊には、他の幽霊が見えないと聞いた事がある。では、人間は？
彼らは、実は常に孤独なんじゃないだろうか。
でも、鏡を見たり、ふとした瞬間に人が見えてしまう。
そんな時に、藁をもすがる想いで、こちらに訴えかけてるんじゃないだろうか」

可哀想と思ってしまった。
孤独で、しかも、鏡でさえも自分を映さない世界。
きっと、堪えられる人間なんていないだろう。

「もしかしたら、そこらへんにある鏡も、向こうの住人にとっては『現世（うつしよ）の鏡』っていう、不思議なアイテムなのかもな」
私と同じ考えに、一瞬ナルホドと頷きかけたが、すぐに矛盾点に気付く。
「鏡に映る幽霊っていうの、聞いたことありますけど」
と突っ込むと、ニッコリ笑って「あっ、そっか」と頭を掻いた。

＃０２　黄泉の鏡（後書き）

実は、この作品が初めて書いた作品だったりします。

＃０３　双子のお守り　陰（前書き）

この『＃０３　双子のお守り　陰』は、『＃０１　双子のお守り　陽』の、続編となっております。
先に、『陽』のほうを読む事をオススメします。

#03　双子のお守り　陰

夏休み。
ジリジリと日が照り続ける中、私は帰宅の途についていた。
というのも、今日は忌(い)まわしき登校日。
本来なら、涼しい部屋で麦茶でも飲みながらゴロゴロしているはずなのに…。

やっとのことで、家の正門に辿り着く。
やっと涼めると安堵(あんど)した瞬間、体全体を熱波が包んだ。

「おかえり」

我が家の居候が、汗をかきながら焚き火をしていた。

この男は、何なんだ？
私が今、求めていないモノをピンポイントで提供してくる。
この男といると、新たな自分に目覚めてしまいそうだ。
おしとやかで通っているはずなのに、今、私の顔は般若に見えていることだろう。

「…精がでますね」

引きつっていたと思う。
たっぷり皮肉を込めて、そう言い放った。

「いやあ、夏の焚き火っていうのも結構良いもんだね。
体の中にある悪いものが、全部出ていきそうだよ」

この男には通じない。
体より、性格の悪さをなんとかしたほうが良いのではないだろうか。
呆れて見ていると、焚き火の中に白い本の表紙が見えた。
「…あれは、確か」
「うん。【ウナ　カンパーナ】」

そうだ。
妹の友達を苦しめた本だ。
あの後、居候は彼女から本を預かり、例のお守りも回収した。
お守りを燃やしたのは知っていたが、本のほうはまだ持っていたんだ。

「気になって、色々調べていたんだ。
作者の事とか、他にも出版された冊子はないかとか。
まあ、結局めぼしい情報は見つからなかったけどね」

人を不幸に陥れる悪意に満ちた本。
作者は、何を思い、何のために書いたのだろう。

「分かったのは、聖書の翻訳本だって事と、本はこれっきりということ。
まあ、名前を変えて出版してるのかもしれないけど」
「聖書って、宗教で使うあの聖書ですか？」
「うん、そうだよ。
聖書に、自分の解釈を入れ込むなんて、勇気がある奴だよな。
やたら逆十字にこだわっていたのも、印象的だった」
「逆十字って、秘密結社やサタンを崇める人が使ってるヤツですか？」
「ちょっと待った。少し誤解があるな。

別に逆十字は、そういうあやしいモノじゃなくて、ペトロ十字っていうちゃんとしたものなんだ。
まあ、たしかに、悪魔崇拝のシンボルとして使われることもあるが…」
へえ～と、素直に感心する。

「今は、この本の流通を探ってるんだ。
とは言っても、素人の出来ることなんてしれてるけどね」
「何か、わかりました？」
「一応、3冊ほど所在が割れている。
市内の図書館、隣りの市立図書館、県立図書館。
全て寄贈品らしい」

寄贈品ならば、もしかして寄贈した人間がわかるかもしれない。
そう言ってみたが、寄贈主が匿名を希望している以上、調べるのは難しいそうだ。

「確か【ウナ　カンパーナ】って、イタリア語で鐘って意味ですよね」
「…ああ」
私も、一応インターネットで調べてみたのだが、こんな情報しか出てこなかった。

「鐘…、扉…、鍵…か…」
「え？」
「…いや」

「鐘」「扉」「鍵」。
今、確かにそう呟いた。
この人、本当は何か知っているのではないだろうか？

そういえば、本の内容にも詳しかった気がする。
本の中に、嘘が混じってると言っていたけど、何故嘘と判ったのだろう。

問い詰めようとした瞬間、玄関の扉が開いた。
二女のサエだ。

「ん？どこかに出掛けるの？」

外出用の服とカバンをかけた姿に、居候が声をかける。
確か、今日は塾に行く日だったはずだ。

サエはアイツに気付くと、少し照れながらペコリと頷いた。
それに答え、アイツも「そっか」と、ニコリと返す。
私との、この態度の違いは何なのだろうか。
やはり、年令なのか？

「いってきます」
サエは、考え込んでいる私に小さな声で挨拶をすると、少し遠い塾へと出掛けて行った。
カバンには、例のお守りの片割れが揺れている。

あの人形を、大量に作る訳にはいかないのだろうか？
そう聞くと、
「オレの管理出来る数量に留めたいんだ。なにより、ハゲちゃうしな」
と、答えた。

翻訳本である【ウナ　カンパーナ】。
今も、図書館やどこかの書店で、普通に並べられているのだろう。

子供達が、この本を手に取っているかと思うと、心が締めつけられる。

「ところで、サエの友達は、何処で本を手に入れたんですかね？」
「学校の図書室らしいよ」

そっか、学校で借りたものを燃やしているわけか。

ソッカ…借リモノ…燃エテル…ノカ。

血液が、音を立てて引いていく。

「大丈夫。昨日、徹夜で一冊書き上げたから」
「そっか。それなら大丈夫ですね」

白い本に綺麗な文字で【ウナ　カンパーナ】と書いてあれば、確かにバレないはず。
それに、翻訳本なんて誰も見ないし、先生にもきっとバレない。

…

「ンな訳あるかあぁ！」
初めてのノリツッコミだった。

ーガタンガタンー

電車が揺れる。
窓の外を、見馴れた景色が流れていく。

今日も、勇気が出なかった。

私は、人見知りが激しい。
まともに話せるのは、家族か友人くらいだ。
直したいと思っているけど、なかなか直せない。

今日も、せっかくあの人が挨拶してくれたのに、うまく声が出ず、会釈で返してしまった。
少しの勇気も出すことが出来ない、自分が嫌いだ。
揺れる電車に身をまかせながら、私は自己嫌悪に苛(さいな)まれていた。

しばらくして、電車がカーブに差しかかり、電車のスピードが落ちた時だった。
「！」
今、何かが、お尻に当たったような。

後ろを振り返り、まわりを見ても変わった様子はない。
それどころか、周りの人に変な顔をされる。
気を付けなきゃ。

気を取り直し、電車に揺られる。

…

「っ！？」
まただ。
もしかして痴漢！？

…でも、もし違ったら。
今見た、周りの反応と、この前見た痴漢冤罪の番組が頭をよぎる。

…ちょっとだけ待って、それでも触っていたら悲鳴をあげよう。

あとちょっと…。

（もし、当たってるのが、カバンとかだったら…）

あとちょっと…。

（もし、違う人を、指し示しちゃったら…）

キッカケを掴むことが出来ず、無限とも思われる時間が過ぎ去っていく。

あとちょっと…。

ここで、あることに気付く。

何かが触れている部分が、序々に暖かくなっていく。

物が当たっているのなら、そんなことはないはず。

私は、伸びをするフリをして、何かが当たっている部分を、軽く手で払ってみた。

！？

人肌のようなモノに当たり、それは一度は引っ込むが、しばらくして、また同じ場所を触りだした。

間違いない。痴漢だ。

早く声をあげなきゃ。

「…た…すっ…ぇ！」

あれ？うまく声が出せない。

こんな時にも、勇気が出ない。

頭の中に、お姉ちゃんとあの人の顔が浮かぶ。

お姉ちゃんなら、どうするだろう。

（お姉ちゃん…。助けて…）

その時だった。
「ぎゃあぁっ！！…あ…ぎ…ぐっ！」
突然、耳元で発せられた叫びに振り返ると、サラリーマンが腕を押さえ、なにやら苦しんでいる。
腕を見ると、あの人に貰ったお守りの人形が噛みついていた。

「このクソが！」
男は、人形を引きはがし、床に叩きつけ踏みつける。
周りの人も異常を感じ、こちらに視線が集まる。

「お前のおもちゃが、腕に当たってんだよ！気をつけろ！」
そう悪態をつくと、踵を返し、痴漢は隣の車輌へと移っていった。

周りからは、同情と軽蔑の視線が集まる。
「何アレ！？かわいそう…」
「最近の子は、カバンにジャラジャラつけて。他の人の迷惑も考えないのかねぇ」

何か言わなくちゃ。
何か言わなくちゃ。
でも、言葉が出てこない。

私は、私を守ってくれた人形を拾い上げると、そっと胸に抱き寄せた。
（助けてくれて、ありがとう）
悔しさと悲しさと自分へのもどかしさで、涙が止まらなかった。

ーチャリーン！ー

ブタの腹が鳴る。
居候が、数ヵ月前から始めた５００円玉貯金。
ブタで陶器で取り出し口の無い、古いタイプの貯金箱だ。
「取り出し口があると、魔が刺す危険性があるからね。
やっぱり、そういう事はキチンとしなきゃ」
ホクホクとしている彼に、私は、「何年かかりますかねぇ？」と、
イヤミを言う。
普段のお返しだ。

「あれー？良いのかなぁ？そういうこと言って。
これを割る頃には、１０万円貯まってんだぞ。
１０万円って言ったら、色々買えるぞ？
服、食べ物、水着、水着…」

そんなくだらない話をしていると、玄関の扉の開く音が聞こえてきた。
きっと、サエが帰ってきたのだろう。
私の冷たい視線を避けるように、居候は玄関へと駆け出した。
「おかえり。お金が貯まったら、サエちゃんには何かご馳走するからね！」
こちらを見てニヤリと笑う。
素でムカつく。
そんな居候に、いつも通り会釈で返すサエだったが、気のせいか元

気が無い。
「よし、トモちゃんにも、ご馳走する約束しなきゃね！」
そんなサエの様子にまったく気付く様子もなく、ニヤニヤとこちらを見ながら、あいつは三女のトモミの部屋へと走り去っていった。

バタバタと足音を鳴らしながら去っていくヤツを見送り、私はサエに話しかける。
「サエ？何かあったの？」
「…なんでもない」
やはり元気の無い声で、サエは答える。

やっぱり、おかしい。
昼間出掛けた時は、元気だったはず。
となれば、塾に行って帰るまでに何かあったのだろうか。

ふと、カバンに目が止まる。
カバンにぶら下がった人形の、口の部分が裂けている。
やっぱり、何かあったんだ。

サエは、普段から悩みを打ち明けることはない。
悩んでる様子も表に出すことはなく、どちらかといえば抱え込むタイプだ。
そんなサエが、目に見えて元気が無い。
今、私のするべきことは…。

「サエ！」

どのくらい振りだろう。サエを、抱き締めたのは。
5才頃、サエが転んでケガをして以来だろうか。
そういえば、あの時以来、サエが泣いたところ見たことないな。

サエは、驚きもせず、飛び退きもせず、ただ、私の抱擁(ほうよう)に身をまかせていた。
サエが、顔をうずめている部分が熱い。
大丈夫だよサエ。分ってる、分ってるから。

「大丈夫。今度の塾には、私もついていくから」
「…」

何があったのかは知らないし、話してくれるまで聞かない。
ただ、サエが今、辛い思いをしてるのは分ってるし、サエがもし助けを求めたい時には、すぐに助けられる場所にいてあげたい。

私とサエは、家族が帰ってくる直前まで抱き合っていた。
途中、居候が様子を見に来たが、私達が抱き合ってるのを見て、「おおう！？」と言って、引き返していった。

2日後。

夏休みの私達学生には関係ないが、世間は日曜日。
親子連れでごった返す中、私とサエは電車に揺られていた。

妹の通っている塾は、夏休み中特別講習が行なわれ、今までの講習日＋日曜日という、遊びたい盛りの学生泣かせなスケジュールが組まれている。
しかも、授業も3時間上乗せされる鬼仕様だ。

「よく堪えられるね」
姉ながら感心する。

「お医者さんになりたいから」
「へえー、サエは医師になりたいんだ。
初めて聞いたよ」
「…守りたい人がいるから」
「…？守りたい人って誰？」
「それは…。
…！？」

急に黙りこむサエ。
不審に思い、顔を見てみると青ざめている。
サエの視線を追ってみると、サラリーマン風の眼鏡の男性が、正面のガラスに映りこんでいた。

サエを見て、ニタニタと笑っている。
居候とは違う気持ち悪さ。
こいつが、一昨日サエが話してくれた痴漢か。

男は、だんだん距離を詰めているような気がした。
また、サエを狙う気なんだ。
大丈夫。私が守るから！

目、顎、喉、鳩尾（みぞおち）、××。
人間の急所を、頭の中で再確認する。
私は、自分でも驚くほど冷静だった。
いや、熱くなってたのかもしれない。
そして、痴漢の方に向き直る。

目があった。
私の存在に、気付かれてる？

だが、そんなことはどうでもいい。
最初から、サエを守るつもりで来たんだ。

改めて、相手を凝視する。
目は、眼鏡で塞がれている。
喉は、身長差でリーチが足りないか。
だとすれば、狙うべきは…！

痴漢は私に狙いを変えたのか、口パクと指で値段交渉をしながら近付いてくる。
厚顔無恥（こうがんむち）で、不敵な態度が気に食わない。
私は、下半身に狙いをつけ踏みこむ。

が、読まれてたのだろう。
下半身を屈めて、痴漢は回避しようとする。

かかった！

私はそのまま踏み込み、掌を斜め上に突き上げた。
下半身を見ながらの、顎（あご）への掌底（しょうてい）。
見事にタイミングが合わさり、後ろによろめく男。

「おい！何だ！押すなよ！」

周りから怒号が響く。
だが、奴は脳が揺さぶられたらしく、うまく立つことが出来ない。

追撃のチャンス。
そう思い、構えようとした瞬間、左腕に体重がかかった。
サエが泣きながら、左腕にしがみついている。

「もうやめて。お願いだから」
昂ぶる気持ちが先行して、一瞬「何で！？」と思ってしまったが、サエが心配してることにすぐ気付く。

「どけ！」
その隙に奴は人垣を押し退け、隣の車輌に逃げ込んだ。

一瞬、追い駆けようとするが、サエは放さない。
「…わかった。もう追わないから」
そう言いながら、サエの頭を撫でたところで、ある異変に気付いた。

あれ？カバンに付いてた人形が無い。
辺りを見回すが、どこにもない。

そうこうしているうちに、電車は駅にたどり着く。
ドアが開き、窓越しに奴が電車から降りるのが見えた。

あれ？
ホームを駆けている痴漢の腰に、何かがぶら下がっている。
こちらに背を向けていて良くわからないが、もしかしてお守り？
そう思い目を凝らしていると、走っている反動なのか、だんだんと人形がこちら側を向いてきた。

「え？」
左目が付いてる。
さっきまでは、無かったはずなのに。

何か嫌な予感がするも、やがて電車は動きだし、次の駅へと出発してしまった。
私は、まだザワついている車内の中、泣いている妹を撫で続けた。

塾が終わり、帰宅した頃には夕方になっていた。
サエと話し合い、居候に今日あった事を話す事にしていた私は、居候にあてがわれた物置部屋を目指す。

居候は、私が部屋を訪れたことに驚きながらも、快く迎え入れてくれた。

「おいおい、危険だろ！
オレも一応男なんだから、遠慮なく頼れよ！」

痴漢と戦ったところまで話して、私は居候に怒られていた。
反省はしている。
でも、サエにとっては聞かれたくない話というのも事実だ。
私は一応謝り、人形が消えたところから話を再開する。

「消えた？」
「ええ。それで、探してたら痴漢が持ってて…。
サエに近づけてはいないから、盗まれたわけじゃないと思うんですけど…。
その人形には、何故か目が付いてて」
「目が付いてた？」
コクリと頷くと、彼は少し神妙な面持ちになった。

「あの人形、顔は裏地に縫いつけてあるんだ。
使い込むと、顔が表側に出てくる」
「…あの人形って、一体何なんですか？」
「悪意を食べる小悪魔」

さらっと、恐ろしいことを言われた。
なんで、そんなモノ持たせたのか！と、狼狽するも、彼は顎に手をあて何処吹く風だ。

「マズいな。このままじゃ成長して、魂を持っていかれる…」
そう言ったかと思うと、勢いよく立ち上がり身支度を始めた。

「探しにいく。
悪魔の目を見た人間は、無差別で魂を持っていかれる」
「え！？私、見たんですけど…」
「オレが言ってるのは、仮初(かりそ)めの目ではなく、本当の目。
その痴漢野郎が犯行を重ねてたら、３番目の目が出てもおかしくはない」

早々に身支度を済ませ、出て行こうとする彼に、「私も行きます」と自薦する。
少し渋っていたが、時間が措しいのか、すぐに承諾してくれた。

駅に着き、私と居候は昼間と同じ電車に乗っていた。
あてはないが、とりあえず奴が降りた駅に行こうとのことだった。

着く間、人形の話を詳しく聞いた。
「小悪魔は人形を器とし、悪意を食べる度に人形と一体化する。
口が現れたのも、そのせいさ。
けど、口はそんなに問題じゃない。
厄介なのは、目だ」
突如始まった、甚平姿の人間のオカルト話に、周り人は距離をおく。

「目を見た人間は、魂を抜かれる。
それを防ぐために、仮の目を裏地に縫いつけてある。
本物の目の変わりに、表に出てくるように」

気にする事なく話を続ける居候に、少しだけ尊敬の念を抱く。

「それにしてもおかしい。同化が早過ぎる。
これじゃ、まるで月の日だ」
窓から空を見ると、まだ青を残す夜空に、三日月が浮かんでいた。

空気が抜けるような音がして、ドアが開く。
私達は、痴漢を見失った駅のホームに立っていた。

「着きましたけど、これからどうします？」
振り返ると、居候はせわしなくキョロキョロしている。
これじゃこっちが不審者だ。

「多分、ココのはずなんだけどな…」
「え？」

そういえば、あの人形には、この人の髪の毛が入っていた。
そのおかげで、位置を把握することができるとか？
にわかには、信じられない話だが、一応私も探すことにする。

居候とキョロキョロすること約１０秒。
「あっ！あいつ！」
向かいのホームで、携帯をいじっている痴漢を発見した。

痴漢の前には、サエと同年代くらいの女の子が電車を待っている。

今度は、あの子を狙う気なのか。

しかし、むこうのホームに行くには、線路を挟んでいる。
橋を渡らなくてはいけない。
そう思った時には、居候はすでに駆け出していた。
私も後に続く。

やっとのことで階段を上り、歩道橋にさしかかる。
窓からは、電車が来るのが見えた。
急がなきゃ。

痴漢は、電車が来たのに気付いたのか、携帯をしまおうとしている。
だが、ポケットに携帯を入れようとしたところで手が止まった。

あれ？今…。
ポケットが動いたような…。

その次の瞬間、びくっと体を震わせたかと思うと、何故か女の子に背を向け歩きだした。
逃げられる！？
私は急いでホームに下りる階段へと向かう。

階段を駆け下りている時だった。

キャアァーー！

女性の悲鳴と擦れるような金属音が鳴り響き、ホームが騒然としだした。

え？なに？

私が階段で立ち尽くしていると、居候が私の方へ振り返り叫んだ。
「マナカは来るな！」
そう叫ぶと、泣き声と怒号が響きわたるホームへと駆け下りていった。

少ししてホームから、「ちょっと君！」という声が聞こえ、また一騒動あったようだが、私は居候の助言通りホームには下りず、黙って待つことにした。

私が、何が起きたのか理解したのは、他の客に詰め寄られている駅員が発した一言でだった。
「人身事故発生のため、運転を見合わせております」

次の日。
居候は、実家から少し離れたウチの私有地で、焚き火をしていた。
あたりには、なんだかよくわからないニオイがたちこめている。
黒く焦げた灰も広範囲に散乱しており、普通じゃないモノを焼いてたのは、すぐに想像出来た。
おそらく、お守りを焼いてたのだろう。

「すまない。毒で毒を制すつもりだったんだが、思ったより猛毒だったようだ。
下手したら、サエちゃんまで巻きこんでた」

さすがに反省したのだろう。
散乱した灰に水をかけながら、謝ってきた。

「色んな予想外、いや、想定外なことが起こった。
でも、その想定外の中でも、人形が勝手に痴漢について行ってく

れたのは幸運だった」

家に戻る道中、例の悪魔について簡単な説明をしてもらった。
本来なら、人に見られるリスクを背負ってまで、人について行くというような大胆な行動は起こさないそうだ。
悪魔でお守りであり、自分で餌場を求めるような、打算的な行動は出来ないようになっているらしい。

「じゃあ、どうして痴漢についていったんですかね？」
「よくわからんが、サエちゃんに渡したのはメスの方だ。
単純に、惚れられたんじゃないか？」

悪魔に好かれるというのも災難だ。
愛は、何者にも止められないというやつか。
でも結果、好きな人の魂を奪えたのだから悪魔にとっては良かったのかも。

「魂を抜かれるって、口から魂を奪い取っていくイメージでした」
昨日の事を思い出し、苦笑いしながら居候に話しかける。
「まあ、映画とかならな。
…ちょっと待ってな」

そう言い、急いで家の中に入ると、ブタの貯金箱を持って戻ってきた。
「この貯金箱の中から、５００円玉を取り出してみな」

無茶なことを言う。
とりあえず、逆さまにして振ってみたりする。
穴から少し硬貨の端が見えているが、やっぱりなかなか出そうにない。

あきらめ、「無理です」と貯金箱を返す。

すると、貯金箱を縁側に置き、こう言った。

「こうしたほうが早いだろ？」

隠し持っていたハンマーを振り上げ、そして、振り下ろす。

大きな音をたて、砕け散る豚の肉片。

中から飛び出る５００円玉。

見てないはずの事故の光景が、脳裏にかすんだ。

「な？こうやったほうが、手っ取り早いだろ？」

貯金箱の残骸には、５００円玉が２枚転がっていた。

＃０４　養老院の姥捨て山　（上）（前書き）

長くなりすぎたので、３部に分けます。
この（上）は、導入部でホラー要素はありません。

＃０４　養老院の姥捨て山　（上）

月の出ぬ静かな夜。
山を登る、二つの影があった。

一人は若い農家の男。
そして、その男に背負われるのは、年老いた男の母親。
二人は泣きながら、山道を登っていく。

「おっかあ。堪忍なぁ」
「こら、泣くでねえ！みっともねえ。
クソの役にもたたねえこのワシが、息子や孫の役に立てるんだ。
こんな幸せな事はねえ」

時は、千年ほど昔。
民は重税や不作に苦しみ、その日の食料さえままならないでいた。
このままでは、みんな餓死してしまう。
彼らが選んだ結論は、年寄りを山に捨てることだった。

「おっかあ…」
「ちいとばかり、逝くのが早くなっただけだ。
…子供、大事にするんだぞ」
「おっかあ…。今まで、育ててくれてありがとうっ！」
「感謝しとるなら、ワシがしてきたことを子供に返してやりゃあええ。
子供を大事に思わん親はいねえ」
「おっかあ…」

どの位歩いただろうか。

二人は、獣達の鳴き声も聞こえぬ、ひらけた場所に辿り着いていた。
きっとここなら、獣達の餌にはならぬ。
そう考えた男は、母親をゆっくりとおろし、胸に仕舞ってあった経本と数珠を手渡した。

「これで、往生出来る…」
老婆はそう呟くと、大事にその二つを受け取った。

数珠を手に取り拝み始める老婆に、背を向け走り去ろうとした男だったが、やはり足どりは重い。
少し歩いては、何度も振り返る男。
そんな男に、老婆は無言で頷いた。
男には、行けと言っている事がわかった。

「…おっかあ。
……おっかあぁぁ！！」

男はそう叫ぶと、駆け出し、二度と振り返ることはなかった。

「これが、姥捨て山という話じゃ」
テーブルを挟んで語っていた祖父が、お茶を飲み、話を締めくくった。

「命に関わる問題でも御上にたてつかないのは、今も昔も一緒って事か」
居候が、茶化すように横口をはさむ。
祖父は苦い顔をするが、それはきっとお茶のせいではないのであろう。

「まあ、たてついても食料は増えないもんな。言い訳も、今も昔も同じだな」
畳みかけるように、言葉を続ける居候。
「そういうことじゃのおて、こういうことがあったって話じゃ。
じゃから、今回の話には、首を突っ込まんほうがええ」
「御上に従う純日本人の私めは、今回の役所の依頼、受けようと思います」
頑として譲らない居候に、祖父からは溜め息がもれる。
「今回依頼された養老院って場所はな、今言った話より、えげつない話があるんじゃて。
悪い事は言わん。手を引きなせえ」
事の発端は、ちょうど一週間前のことだった。
…
その日、家に帰ると、見馴れない一台の車が、家の前に止まっていた。
お客さんかな？と、思いながら家に入ると、応接間にスーツ姿の男が通されていた。
「さすが水無瀬家！ご立派なお屋敷ですな！」
お茶を出す母に、調子のいい言葉を投げ掛ける男。
その言葉に、母は愛想笑いで返す。
きっと、母の苦手なタイプなのだろう。
「少々、お待ちを」と、お盆を下げる母とすれ違い、男が部屋を覗いている私に気が付いた。
「おや、娘さんですか？お美しい娘さんですねえ！」

これが、太鼓持ちというやつか…。

一応、愛想良く会釈を返していると、後ろの襖が開き、祖父が仏間から出てきた。

「マナカは、下がっときなさい」

応接間を覗いていた私をたしなめ、中へと入っていく。

「お待たせしました」

応接間へと続く襖が、目の前でピシャリと閉められた。

「水無瀬家の長、水無瀬断造と申します」

「これは、はじめまして。私、こういう者です」

「ほう、市役所総務部の服部さん。

で、どういった、ご用件で？」

漏れ聞こえる声で、男が市役所の人間だと判る。

市の職員が、家に来るなんて珍しい。

少しはしたないと思いながらも、好奇心にかられ、私は盗み聞くことにした。

襖に耳を当て耳を澄ましていると、不意に肩を叩かれる。

驚いて振り返ると、居候が不審そうな顔をして見ていた。

（何してんだ？）

（…どっか行っててください）

（…。だんだん、オレの扱いが酷くなってねえか？）

その言葉に、日頃の文句を言ってやりたかったが、祖父に気付かれそうなのでやめておいた。

人指し指を立て、静かにするように促す。

どうやら、居候も興味を持ったようで、一緒に盗み聞くことになった。

「実は、市のほうで福祉施設を誘致することになりまして。
何とか上手くいきかけたんですが、途中問題が起こりましてね。
そのことで相談にと。
本来なら、施設誘致は産業経済部の仕事のはずなんですが、
嫌な役回りはいつも総務部ですよ。ハッハッハッ！」

襖を痺れさせるような大きな笑い声に、耳を当てることは不要だと気付く。
（あ、こいつか）
居候は腕を組んで、何か納得した様子で聞いている。

「最初は、月宮神社に依頼しようとしたんですが、断わられましてね…。
何度か伺わせて頂いたのですが、やはり頭を縦に振って下さらない。
弱っていたところ、そこの巫女さんがあの有名な水無瀬家の方だと聞きましてね。
いや～、私はついてる。ハッハッハッ！」
「…で、肝心のご用件は？」
「ええ、実は施設を建てる場所というのが、現在廃寺のある場所でしてね。
撤去しようにも、ほら、やっぱり色々抵抗あるじゃないですか。
そこで、お祓いを頼もうと…」
「腑に落ちんですな。
いくら廃寺であろうとも、お祓いにこだわる必要はあるんでしょうかな？
断わられたら、お祓い無しでも施工する。
それが、行政というもんでしょ」

「…かないませんな。
いえ…騙すつもりはなかったのですが。
実は、この件で色々作業員に被害が出ておりまして…。
お祓いを頼まざるを得ない状況なんです。
このとおりです！お力をお貸し下さい！」
「お帰り下さい」

（即答！）
思わぬ即答に、噴き出しそうになる。
そんな私を、不審そうな顔で見つめている居候。

「何故ですか！？
水無瀬家といえば、その筋では有名と聞いております。
謝礼ならお支払します。どうか！」
「私達家族は、因果に縛られておるのです。
好きで、特別な力を授かっておる訳じゃない」

それでもと、謝礼の具体的な数字で提示し、すがる男。
断わるごとに、その金額は上乗せされていく。
それでも祖父が、頷くことはなかった。

「どうか！どうか！」
「市がワシの姉にしたこと、忘れとりゃあせんぞ！」

祖父の突然の激情に、思わず居候と顔を見合わせる。

「それは４０年以上も前の話で、私達には関係ないでしょ！？」
「いや、あんたはワシの孫まで捲き込もうとしている。
孫に、姉のような思いはさせん！」

祖父が、こんなに怒るのは、私の知るかぎり初めてだ。
祖伯母様と市役所との間に、一体何があったのだろう。
驚いてる私に、居候が小声で話しかけてきた。

（あのオッサン、サエちゃんが水無瀬家の人間だと知って、神社でつきまとってたらしい。
神主さんから、報告がきてたって）
（だからおじい様、今日少し不機嫌だったんですね。
…でも、サエも私に相談してくれればいいのに）
（姉ちゃんだと、すぐに手が出るからじゃないか？）
（な！？）
（冗談だよ）
茶化してくる居候にムカツくものの、祖父の様子が気になるので無視することにした。

「また来ます」
さんざん押し問答の末、男はあきらめ帰っていった。
塩こそ撒かなかったが、彼が使った座布団を、虫干しするよう母に言いつけたのを私は聞き逃さなかった。

「この雰囲気じゃあ、爺ちゃんに話は聞けねえわな…」
おお！珍しく空気を読んでる！
と、私が感心していると、「爺ちゃんの姉ちゃんについて、何か知ってる？」と、聞いてきた。

私に聞かれても…と困るが、祖伯母様の逸話をなんとか思い出してみる。
しかし、思い出せたのは、祖伯母様がかなりの力を持っていた事、内臓の病気で亡くなった事ぐらいだった。

「もう、かなり昔に亡くなられていて、私はおろか、母さえも会ったことがないんです。
恐らく家で知っているのは、おじい様だけかと…」
「…そっか。
じゃあ、今日役人が来たのは、誰かに祖伯母さんの力の事を聞いてた役人が、
それを頼りに訪れた構図か」
「でも今、私の家族で霊を払える人なんていないと思うんですけど…」
それを聞いて、居候はいきなり私の体を、下から上へと舐めるように見上げてきた。

「…まさかな」
鳥肌が立ち、身震いがし、頭に血が上る。
「まさかは、あなたですよ！人の体、じーっと見て！」
「え…ちょっと待て！誤解だ！」
「最近、少し信用してたけど、やっぱりあなたも男なんですね！」
私は、かつて暴漢と戦った時と同じ様に、腰を落とし身構える。
「何の話だ！オレは潔白だ！」
居候も私に対抗するように、何かの映画で見たような構えを繰り出す。

二人の間を、緊張感が包み込む。
お互い、ジリジリと間合いを詰めていく。
呼吸をするのも、瞬きするのも、もどかしい。
まさにそこは、生死を超越した彼岸。

「アンタ達、何やってんの？」
気が付くと、母と妹達が、私達の事をポカンとして見ていた。

かくして、二人は違う意味で頭に血が上ることになるのであった。

それからほぼ毎日、市役所の人はやってきた。
祖父にそっぽ向かれる度に、私やサエ、小学生のトモミにまで話かけてくる男に、みんなウンザリしていた。
神社にもよく来るらしく、サエは二重苦に見舞われていた。
私が文句言ってくると言うと、サエと居候に二人がかりで止められた。

そして、一週間後。
その日も帰ってくると、あの男がいた。

「どうか！どうか！」
すがりつく男に、祖父もいい加減げんなりしている。
「あなたも、しつこいねえ。
一昨日も言ったように、私らの世代にゃあ、強い力を持った者はおらん。
どうしてもというのなら、他を当たりなせえ！」
「仕方がないでしょう！ここしか、頼るところがないんですから！」
逆切れぎみに訴える男。
「いい加減、孫もウンザリしとるんじゃ。
付きまとうのはやめなせえ！」
「あなたの孫より、私の立場のほうが大切だ！」

あたりが静まりかえる。

その様子に、本人も自分が何を言ったのか気付いたようで、あたふたとし出した。
「し、失言しました」

さすがに祖父も、この発言には堪忍袋の緒が切れたのか、見る見る顔が赤くなっていく。
これから起こるであろう修羅場を、固唾を飲んで見守る。

「爺さま、落ち着いて」
突然、居候が割り込んできた。
「大丈夫。
この依頼、オレが引き受ける」
「待ちなせえ！
こんな男の、依頼を受ける必要は無い！」
まあまあと祖父をなだめつつ、冷や汗を流している男に、馴れ馴れしく語りかける。

「で？何処に行けばいいんだ？」
「…は、はあ。
あの…、上代山という山がありまして…」
「上代山！？
あんた！養老院に行かせるつもりじゃったんか！」
紅潮していた祖父の顔が、さらに赤みがかった。

「処分にあぐねいていた土地に、やっと買い手がつきそうなんですよ！
このチャンス、逃す訳にはいかないでしょう！
市は、誘致に成功し、目の上のコブを処分出来る！
業者も、安価で土地を得て、ビジネス出来る！
あなた達は、稀有な力でお祓いをし、報酬を得る！
何か、いけませんか！？」

もはや逆ギレを通り越し、最悪な事をベラベラと唾を飛ばしながら主張をしてくる役人。

「おいおい…何、ムキになってんだよ…。
だから、行くって言ってんだろ？
爺さまも落ち着いて」
顔を真っ赤にしている二人に挟まれ、居候も困り顔だ。
「上代山はいかん！
あそこは、姥捨て山じゃ！」

「姥捨て山？」
私は、聞きなれない言葉に聞き返す。
「…姥捨て山なんて、本当にあったのか」
居候も、驚いた様子で祖父を見ている。

「そ、それじゃあ、お願いします！
日程は、また後日！」
驚いている私達を尻目に、役人はいきなり早口で捲くし立てると、
祖父の制止も聞かず、脱兎の如く去っていった。
あまりの非常識ぶりに、呆気にとられる私達。

「色んな意味でスゲエな、あの人…」
「…そ、そうですね。
…ところで、姥捨て山って何ですか？」
そう質問する私に、居候は少し俯くと、
「…選択を迫られた人間が、最も愚かな選択をしてしまった話さ。
抗うこともせずに…」
と、答えた。
よくわからない。

「二人とも、そこに座りなせぇ。
姥捨て山がどんな話か、話しちゃるけぇ。
ちょっとキツイ話じゃけぇ、心して聞きなせぇよ」

居候が折れる事を期待しているのか、祖父は顔に凄味を持たせ本気モードだ。
逆効果だと思うのだが…。

…

そして、祖父の会心の力説が終わり、今に至るのだが、結局祖父の説得にも応じず、居候は養老院へと行くことになった。

でも、私は知っている。
彼が、何故行くと言ったのかを。

お守りの一件で、サエは少し男性不振になっていた。
痴漢男と同じスーツ姿の役人に、サエも内心かなり怯えていたことだろう。
そんなサエの事を、居候は随分気遣ってくれていた。

「サエのために、引き受けてくれたんですよね？
ありがとうございます」
私は、姉として素直に感謝し、お礼を述べた。
「え？あ、ああ」
素直にお礼をいう私に、少し戸惑った様子だったが、きっと照れているのだろう。

当日、見送ることが出来ない私は、「いってらっしゃい」と、少し早いお見送りを済ませるのだった。

＃０４　養老院の姥捨て山　（上）（後書き）

＃０４　養老院の姥捨て山（中）に続きます。

＃０４　養老院の姥捨て山　（中）（前書き）

養老院の姥捨て山（上）の続きです。

＃０４　養老院の姥捨て山　（中）

山への出発日。
非常食諸々を詰め込んだリュックを背負い、集合場所までバスで向かう。
頭にはやまびこ帽子、厚手のズボン、登山服、登山靴と、完璧な登山スタイルだ。
バスは山の中に入り、やがて集合場所へと辿り着いた。

誰もいない。
どうやら、早く来すぎたみたいだ。

しばらくし、案内役を努めてくださる、登山ガイドの上田さん、市役所総務部の服部さんが自家用車で現れた。
そして、もう一人の同行者を待つ。
やがて、一つ遅れのバスが着き、最後の一人が降りてきた。

１８０はありそうな長身。
ボサボサの髪。
無精髭。
そして、山登りには不釣り合いな甚平姿。

「お前、何やってんだ…。マナカ」
その男は、私を見るな否や、山登り装備バッチリの私に話しかけてきた。

バスを降り、近付いてくる居候に、「ついてきちゃた♪」と舌を出す、脳内シミュレーションをして待ち受ける。

そして…。

「お前がここにいたんじゃ、意味がないだろ！」

「え…？」

予想外の反応に面食らった。

居候の目は真剣なもので、瞳からは怒りすら感じる。

「いいじゃないですか。

水無瀬家の人のほうが、どこの誰だかわからないアナタより頼りになる」

服部さんが、少し毒突いた援護射撃を出してくれる。

しかし居候は、そのままの表情で向きを変え、服部さんのほうへ一直線に向かうと、

「ふざけんなっ！」

と、胸ぐらを掴んだ。

「ぼ、暴力はいけません。や、やめてください！」

怯えた表情で私に助けを求めるが、居候もすぐにこちらを睨み、

「お前は、すぐに帰れ！」

と、言い放った。

しかし、居候が乗ってきたバスはとっくに走り去ってしまい、次のバスに乗るには1時間程待たなければならない。

辺りには人家やお店等のひと気はなく、近くで工事をしているのか、時折、ダンプが行き来している。

居候も、さすがに女一人をこの場所に置いておく訳にはいけないと感じたのか、養老院への同行をしぶしぶ許可した。

雲の子一つ無い青空。
残暑もすっかり収まり、山登りにも苦の無い気温になっている。
ほとりに立つ木々の葉はやや色付いていて、もみじやイチョウも、もうしばらくすれば見頃になるだろう。
ハイキングするには、丁度良いコースだ。
その景色とは対称的に、私と居候との間には、なんとも気まずい空気が流れていた。

完全に、この人は怒っている。
やっぱり、祖父が危険な場所だと言ってたからかな…。
でも…だからこそ…。

「…なあ。マナちゃんは子供の頃、よく病気にならなかったか？」

急に話しかけられ、動揺する。
でも、驚いているのを悟られるのが嫌で、平静を装い答えた。

「…はい、よくなりました。それが、どうかしましたか？」
「…いや」

会話が終わり、再び沈黙が辺りを包む。

たしかに、私は昔から体が弱く、病気にもよくなっていた。
しかし、今は大きな病気もせず、健やかに住ごしている。
でも、何故今そんな事を聞くのだろう。

「…なあ、会ったばかりの頃にした約束、憶えてるか？」
「約束？」
「…いや、いい」

また会話が途切れ、二人の間を微妙な空気が漂う。
さっきから、居候は何が言いたいのだろう。
居候を見てみるが、無表情でもくもくと山を登っている。

「…ほら」
居候が急に立ち止まり、私に向かって手を差し出してきた。
「…何ですか？」
「荷物持ってやる。早く出しな」
「あ、ありがとうございます…」

気まずい空気の時の親切ほど、反応に困るものは無い。
どんな顔をしていいか、わからない。

「でも、おぶるのは勘弁な。
体重増えたって、言ってたもんな」
「な！？」
昨日の風呂上がりに、母と体重の話をしていたことを思い出す。
盗み聞きしていたのか！
私は、居候に荷物を投げつけるように渡すと、足音を鳴らしながら
一人でさっさと登っていった。

「楽なのは、ここまでです」
１０分ほど歩いた所で、下界の景色を見渡せる場所に出た。
下界といっても、町の景色が見渡せる訳ではなく、隣り合う山の麓
が見えるだけなのだが。
隣りの山との間には川があり、川を挟んだ向こう側には重機が見え
る。
おそらく、施設への道路工事をしてるのだろう。
木は切り取られ、黄土色の土が剥き出しになっている。

「なんで、こんな山奥に施設を建てる必要があるんだ？」
居候が呟く。
「それは、私も思います。
わざわざ橋を架けるほどの大工事。
意味があるとは思えませんし、山の自然が破壊されるのには憤りを感じます」
登山ガイドの上田さんが、少し怒りながら眼下にある重機を見つめる。

「確か、土地の処分に困ってたって言ってたんだよな。
得る利より、出銭の方が多そうだけど…。
…こういうのは大体、利権絡みなんだよな。
あの役人、天下っちゃおうとか思ってるんじゃないの？」
チラッと、私の遥か後方でへばっている、服部さんに目を向ける。
本人が大分後ろにいるため、言いたい放題だ。

「じゃあ、この工事も談合っちゃってるかもしれませんね」
上田さんも悪のりをする。
「アハハッ！確かに！」
ツボに入ったのか、居候はゲラゲラと笑っている。
談合と言ったら税金の無駄遣いで、笑える話じゃないと思うんだけど…。

それから二人は、服部さんが追い付くまでの間、
「お兄さん、面白いねえ。普段何やってんの？」
「ええ、実は…」
「へえ！そうなんだ！」
「あなたは何を？」
「ええ、居候を」

「それ職業じゃないじゃないですか！ハッハッハッ！」
などと、子供にはついていけない話で盛り上がっていた。

道はどんどん険しくなり、女の私には、荷物無しでも結構厳しい。
上田さんと居候にフォローされながら、やっとの思いでついていく。
中年の公務員にはさらに厳しいようで、服部さんとの差もどんどん広がっていく。
森は手入れしてないゆえに、日陰も多くなり、独特の湿った空気が体にまとわりつく。
木で出来た、自然のトンネルに差しかかり、周りがより一層暗くなった時だった。

ぉ……うん……ぅ……

「え？」
今、何か声が聞こえたような。
前を登っている二人を見てみるが、何か喋った様子はない。
気のせい？

…す…ぃ……ぶし…

やっぱり聞こえる。

木々のざわめき？
しかし、風は吹いてない。
疲れによる、幻聴？
いや、そこまでは疲れてないはず。

私は、居候に問い掛けてみた。

「何か聞こえませんか？」
「…？いや、聞こえないけど？
それより、耳鳴りが酷いな。
結構、山を登って来たからか？」
居候は、わざとアクビを出して、耳鳴りを直そうとしている。

その時、少し前を先行していた上田さんが、私達に向かって叫んだ。
「もうすぐです！」
上田さんのいる所まで行くと、急だった上りは終わり、なだらかな道が続いていて、その先に古い建造物が見えた。

「一旦、ここで待ちましょうか。大分離れたみたいですし」
振り向くと、服部さんは米粒の大きさになっていた。

「随分遅かったな」
１０分後、彼はようやく私達に追い付き、その場に倒れるようにへたり込んだ。
居候の言葉に返事も出来ず、息も切れ切れ、額からは汗が滝のように流れている。

「服部さん。もう少しなんで、頑張りましょう」
上田さんが、へばっている服部さんにミネラルウォーターを渡し、もう少し歩くようながす。
訴えるかけるような目をしながらも、ミネラルウォーターを少し飲み、ヨロヨロと立ち上がる服部さん。
そして、上田さんの肩を借り、歩きだした。

「ちょっと待った」
居候が呼び止める。

そして、いぶかしげな顔をすると言った。

「さっきから背負ってる、そのばあさんは迷子かい？」

空気が凍る。

「いいやぁぁだぁぁぁぁ！！！」

リュックを投げ捨て、背中を払いのける仕草で暴れまわる服部さん。

それはまるで、原住民族の鼓舞を見ているようだった。

「なはは！冗談だって！」

全く悪びれない様子で、背中をバシバシと叩き、笑う居候。

まったく、この人は…。

「…こ、この人嫌いだぁぁぁぁ！！」

服部さんの声が山にこだまし、私達は無事目的地に到着したのだった。

到着して目の前に現れたのは、高い塀に囲まれた古い寺。

相当古いようで、所々土壁は崩れ、塀の瓦も下に落ち砕けている。

正門の扉も壊れてはいるものの、押せばなんとか中に入れそうだ。

扉の横の表札には、かすんだ文字で上安寺と書かれている。

養老院。

この場所には、かつて上安寺という尼寺があった。

その寺の尼さんは慈悲深く、邪魔者扱いされているお年寄りや、経済的に余裕の無い家庭のお年寄りを預かっていた。

いつしか、この山を含んだここら一帯を、養老院と呼ぶようになっ

た。

「しかし、それは表向きの話だ。
爺さんの話じゃ、その引き取った老人達は、大層ひでえ目に合ってたって話だ」
「当時も、お年寄りが虐待されてるって噂は、あったらしいですね。
何故、預けるのをやめたり、連れ帰ったりしなかったんでしょうね？」
「捨てるほうも、預けたって事にすりゃあ、罪悪感が減るってもんだろ？
実質は、姥捨て山と同じさ」

そう言うと居候は、半開きになっていた扉を押し開け、中へと入っていった。
私とガイドさんも後に続く。
だが、服部さんがついてこない。

「ん？はよ入りな」
正門を前に、尻込みする服部さんに、居候が早く来るように促す。
「で、でも、作業員が何人か行方不明になったって…」
「お前がした依頼だろ！お前が来なくてどうする！」
居候は襟首を掴み、強引に寺の中へと引っ張りこんだ。

上安寺の中は意外に広かったが、やはり荒れ果てていて、雑草も胸の高さまで伸びきっていた。
建物も相当ガタがきているようだったが、風が良く吹き、日当たりが良いせいか、腐って倒壊ということはなさそうだ。
建物は全部で三棟あり、真ん中の一番大きい建物が本堂なのだろう。

「…で、何から始めるんです？」
服部さんが体を縮め、キョロキョロと周りを警戒しながら、居候に問い掛ける。
最初に会った時とまるで違う印象に、心底情けない人と感じる。

居候は、リュックの中を手で探ると、厚手の布にくるまれた物を取り出した。
あれ？どこかで見たような…。
布が解かれ現れたものは、私が何時ぞやか、倉庫に封印した鏡だった。
「これで、霊を見ることが出来ない人間も、霊を確認することが出来る」
「それって、黄泉の鏡ですよね？
何、勝手に持ってきてんですか！？」
「だって、必要だもの。
幽霊見えなきゃ、祓えないだろ？」
「…え？幽霊見えないんですか？」
「あれ？俺、いつ見えるって言ったっけ？」

思い返してみれば、確かに見えるなんて一度も言ってない。
でも、悪魔の入った人形を作ったり、今、持っている鏡を作ったのも居候だ。
どういうこと？

そんなことを思っていると、「幽霊見えなくて、どうやって祓うんですか！」と、服部さんが激昂しだした。
そんな彼を、面倒臭そうな顔で見ながら、「だからこその、便利なアイテムだろ？」と、手に持っている鏡を覗きこんだ。

次の瞬間。

「…！今すぐ、外に出ろ！」
「ひぃぃぃーーーー！」
鏡を覗いた居候が叫び、それに驚いた服部さんが一目散に扉へと駆け出す。

「いてっ！」
錯乱した服部さんが居候にぶつかり、持っていた鏡が地面に落ちた。
不思議なことに、落ちた鏡は割れず、鏡面はまるで水面のように波打っていた。
やがて、波が収まり、居候が見たものが鏡面に映し出される。
そこには、数えられないほどの老婆が、鏡を覗いていた。

「ひっ！？」
私達も急いで、門へと向かう。
だが、扉の前には、先に扉に向かったはずの服部さんが、呆然と立ち尽くしていた。
半壊していたはずの扉が、ぴっちりと閉まっている。
まるで、最初からそうであったかのように。

「や、やっぱり、中に入るべきじゃなかったんだ！
ど、どうするんですか！？」
「…。
…ちょっと、この数は予想外だったな。
まあ、幽霊であるだけマシか」
居候はそう言うと、またもやリュックを漁り、今度は数珠をジャラジャラと取り出した。

「とりあえず、コレを持っとけ」
「これをつけていれば、安全なんですね！」

半泣きになっている服部さんが、居候が持っている数珠にすがりつく。
「いや、普通の数珠だ。無いよりはマシだろ？」
安堵の色が、絶望の色に変わった。

「さてと…3人は出口を探してくれ。
どんな建物でも、裏口はあるはずだ。
オレは、お祓いするために寺を調査する。
心霊現象の大本を探りたい。
それと、鏡はここに置いていく。
どうやらあいつら、あの鏡に興味を持ったようだ。
丁度良い、注意を引きつけておこう」

勝手に話を進め、3人を置いて建物に向かおうする居候。
私は急いで居候の袖を引き、引き止めた。

「あの人と一緒はイヤです」

指で指すのは失礼なので、顎で役人を指した。
青い顔をして、オドオドしている服部さんの顔を見て、溜め息をつく。
「はぁ…わかった。
でも、オレから離れるなよ。
じゃあ、とりあえずドアが壊れている左の建物から入るぞ。
メインディッシュの本堂は後にしよう」

私達は、左の建物に向かった。

左の建物は、形状から察するに倉のようだった。
壊れた扉を踏み越え屋内に入ると、中は吹き抜けになっており、天

井が高く感じる。
下には床が無く、地面が剥き出しになっている。

「屋内なのに、土が剥き出しですね」
「それに、案外広いな。
ここは、何かの作業場か？」

とりあえず、二人で内部を調べてみることにした。

「しかし、建物って案外もつもんだな。
爺さんの話じゃ、江戸時代に建てられたものって話なのに」
「市が、管理してたんじゃないですか？」
「そうなんだろうなぁ。普通なら倒壊するよなぁ」
そんな雑談をしながら、探索していると…。

…かた…ぁ…む……う…る…

！？

まただ…。
また、あの声が聞こえる。
今度は、来る道中で聞いた時より、はっきりと聞こえる。
それはまるで、歌のように聞こえた。

「…歌が、聞こえませんか？」
「…？
…いや、聞こえない。
…やっぱり、マナちゃんはあの二人といたほうがいい」
「イヤです」
キッパリと言う私に、またも溜め息をつく。
幸せが逃げますよ。

結局この倉では、目ぼしい物も、歌の出所も見つけることは出来なかった。
しかたないので、他の建物に行こうかと、扉に向かおうとした時だった。

「待った」
私を制止し、居候が何かに歩み寄る。
よく見ると、黄ばんだ固形物が、土から少しだけ露出していた。

「何だろ？」
近くにあった棒切れで、居候が土を掘り返す。
少し掘りかえしたところで、それが何かに気が付いた。

「骨ですね…」

しゃれこうべだ。
何故、こんな所にしゃれこうべが？
頭部には、刃物で切られたような損傷がある。

「刀傷…だな。
この仏さん、誰かに殺されたみたいだ」
「…なんでこんなところに」
「さあな。
まあ、とりあえず供養してやらなくちゃな」

居候が頭部だけでもと、掘り返しているところで気付いた。
「右のほうにも、骨見えてませんか？」
「…おいおい、全部掘り出させる気か？

まあ、いいや。
これも掘り出したら、あとは業者にまかせるぞ」
私は、発掘作業を居候にまかせ、他に見落しがないか周りを見渡してみる。
しばらくして、発掘が終わったのか、居候が手を止め、私に話しかけてきた。

「…おい」
「なんですか？」
「また、しゃれこうべだ…」

見ると、堀り返した場所に頭蓋骨が剥き出しになっていた。
そのしゃれこうべにも、同じく刀傷がある。

嫌な予感がする。
まさか…。
まさか、この下に大量のしゃれこうべがあるというのだろうか。

「とりあえず、ここから出よう」
私は居候の言葉に従い、足早にそこを離れた。

＃０４　養老院の姥捨て山　（中）（後書き）

養老院の姥捨て山（下）へ続きます

＃０４　養老院の姥捨て山　（下）（前書き）

養老院の姥捨て山（中）のつづきです。

＃０４　養老院の姥捨て山　（下）

外に出ると、まだ寺の境内にいるというのにもかかわらず、少し安心出来た。
あの二人は、まだ出口を探索中のようで、まだ戻ってきていない。
私達は、とりあえず本堂の近くで彼らを待つことにした。

本堂の登り階段に腰かけ、二人で二人を待つ。

「あの二人が帰ってきたら、マナちゃんは二人と一緒にいること。
流石に、本堂には入れさせない」
「え…？」
「見ただろ、今の。
本堂では、何が待ってるかわからない。
いくら役人が頼りなくても、本堂に入るリスクを考えると、二人と一緒にいた方がいい。
上田の兄ちゃんもいるし」
「…でも」
「登山も了承したし、倉への同行も許可した。
もう十分、ワガママは聞いただろ？
それに、この寺は想像以上に根深い。
お前を守りきる自信が無い」
「…わかりました」

確かに、私のわがままだ。
好奇心も少しあった。
でも…危険な場所だって聞いたからこそ…。
だからこそ…あなたが心配で…。

あの二人は、なかなか戻ってこなかった。
私も、かなりの時間腰かけていたせいか、若干お尻が痛い。
ストレッチでもしようかと、腰を上げようとすると、先に、大きなアクビをしながら居候が立ち上がった。
暇を持て余したのか、彼は階段を上り、本堂の周りに張り巡らされている廊下に立つと、他に入り口は無いかと探し始めた。
「私も一緒に探します」と、言うと、「まあ、中に入らないのなら」と、いうことで承諾してくれ、一緒に他の入り口を探すことになった。

廊下に上がると、やや高めに作られているせいか、あたりを見渡すことができた。
ほとんどが草で覆われていて、まさに廃寺という感じだ。
しかし、よく見ると、所々草のない場所がある。

「所々、ハゲてますね」
「っ！？
まじかっ！どこが、ハゲてる！？」
「…え？
…あそこと、あそこですけど」

草のない場所を指で指し示すと、何故かホッとしながら、その場所を眺めた。

「あ、ホントだ。なんでだろう」
「…また、何か埋まってたりして」
「…下に骨があっても、草は生えるだろ」

私達は、一旦入り口を探すのをやめ、ハゲてる所に行ってみることにした。

近付いてみると、すぐにその場所が変なのに気付いた。
土が新しい。

「誰かが掘り返したのか？
しかも、つい最近」
「…工事の下準備とかですかね？」
「まだ、更地にしてないのに？
下準備にしては、不自然だぜ？」

居候が土をつま先で蹴ると、土が新しいからか、簡単に飛び散っていった。
「本当に、何か埋まってるのか？」
続けざまにゲシゲシと蹴る居候。
しかし、急にバランスを崩し、前のめりに倒れた。
「いてっ！…何か蹴ったみたいだ」

私は、何につまずいたのかを確認し、そして、後悔した。

「キャアァーーーッ！」
そこにあったのは、人の手だった。
「…！？
むこう向いてろ！」
居候の声に反応し、すぐさま目を背ける。

…何も見てない。
…私は、何も見てない。
…あれは人形と、固く目を閉じ念じるが、嫌なモノほど頭に残る。
生者とは全く違う肌の色。
血が通ってない、幼い頃見た、深く悲しい色。

「大丈夫！取れてない、繋がってる。
ただの死体だよ！」
…フォローになってない。

「作業服か…。
こいつ、例の行方不明になった作業員か？」
行方不明の作業員…。

服部さんが言うには、色々被害が出てたという作業現場。
最初に家に来た時は、詳しく話していかなかったが、決行日の打ち合せの時、居候が詳しく聞いてきたらしい。
その内訳は、軽傷2名、行方不明2名、発狂1名。
その行方不明者が死んでいた…。

ふと我に返ると、ザッザッと土を掘り返す音が、後ろから聞こえてきた。

「な、何やってるんですか！？」
「こいつらの死因は何だ。
ここの霊に、直接手を下せるほどの力が、本当にあるのか」

やめて！と、止めたかったが、ふとした拍子に何か見えてしまうんではないかと、声をかけられない。
骨を見るのはまだ大丈夫だが、流石に他人の死体となると私には無理だ。

やがて、掘る音は止み静寂が訪れた。
「…」
息を飲んで、居候の言葉を待つ。

しかし、彼は何を思ったか、急に穴を埋め始めた。
「どうかしましたか？」
「…」
答えてくれない。
だんだん恐くなってくる。

その時、ガサガサと草を掻き分ける音が聞こえてきた。
「何事ですか！？」
私の悲鳴を聞きつけたのか、上田さん服部さんが駆けつけてきた。

「いや～、マナカがヘビに驚いてさあ～」
何故か嘘をつく居候。
「可愛い所もあるもんだよなぁ。
…で、裏口は見つかった？」
上田さんの肩に手をまわし、その場から離れるように歩きだす。
「それが、どこ探しても裏口が無いんです！」
「…そうか。老婆たちを脱走させないためか…」
私が、どうしていいかわからず、立ち尽くしていると、居候がこちらに目を向け、目線で「ついて来い」と促す。

私は、黙って居候の言うことに従うことにした。
その目に、妙な緊迫感があったから。

少し歩いて、服部さんがついて来てないことに気が付いた。
振り返ると、明らかに動揺した様子で、死体があった場所をチラチラと気にしている。
「どうしました？」
私は冷静を装い、話しかけた。
「い、いえ…。なんでもないです」

居候も、服部さんの様子に気付き、
「まさかアンタ、ヘビが怖いってんじゃないだろうな？
　大丈夫だよ。毒を持ってないヘビだし」
と、いつもの口調で毒突いた。
「そ、それなら安心です」
少し名残惜しそうにしながらも、服部さんは私達についてきた。

「入ってないのは、本堂と右の建物の二棟か。
　やっぱり、右の建物にも入っておくべきか？」

居候の様子は変わらない。
死体を掘り返した居候は、何を見たのだろう。
そして、服部さんの様子がおかしいのは何故だろう。
何もわからないが、今は何も喋るべきではない事だけは、私にもわかった。

「実は、私と服部さん、今さっきまで右の建物にいたんです。
　というのも、右の建物は塀に密着していて、出口を探すために入らざるを得なかったんです。
　ですが、出口どころか窓も無くて…。
　内部の損壊も激しく、危険なので入らないほうがいいです」
「そうか…。
　じゃあ、残るは本堂だけだな」

ゴロゴロゴロ…

気が付けば、頭上に黒い雲が浮かんでいた。

「山の天気は、変わりやすいですからね。

降らなければいいですけど…」
上を見ながら、呟く上田さん。
「た、建物の中に、避難したほうがいいんじゃないですかね？
か、雷も鳴ってるし…」
同じく上を見ながら、呟く服部さん。
この人は、雷も怖いのか？

「左の倉には骨が埋まっているが、それでも良ければどうぞ」
居候がニヤニヤしながら、服部さんに言い放つ。
「え？骨！？」と驚き、やっぱり…と、前言撤回しようとする服部さんだったが、
「確かに、服部さんの提案にも一理あります。
雷の音も、少しづつ近付いてるみたいですし、一旦建物の中に避難しましょう」
と言う、上田さんの一声で、倉で雨宿りすることが決定した。
どうやら服部さんには、自分の発言が意図しない方向に転がる、貧乏神が取り憑いてるらしい。

「い、いやだ！」と言う、中年の駄々っ子を引っ張りながら、私達はあの倉へと向かう。
途中、居候が、鏡が気になるという事で、鏡を見るため離れていった。
少し心細くなりながらも、私達は、あのしゃれこうべ御殿に向かう。

しかし、そこで待っていたのは、小さな衝撃だった。

「え？なんで？」

倉の扉が。
壊れていたはずの、倉の扉が閉まっていた。

「ここの扉、壊れていたはずですよね？」
と、居候に確認しようと振り返ると、彼は鏡がある場所で、鏡をじ～っと見詰めていた。

「…あれ？
鏡に映ってた老婆達がいないぞ…」

ゴロゴロゴロ…

雷の音が空気を震わせる。

「…雷が、かなり近付いてます！
危険ですから、屋内に入ったほうがいいです！」

上田さんの言う通り、雷の音は大きくなり、近付いているのがわかった。

「でも、もう入れるのは、本堂だけだぞ」

そう、右の建物も左の倉も、もう使えない。
もう選択肢は、無くなってしまった訳だ。

「…誘われてる？」
居候の発した一言に、寒気が走る。

「マナちゃん、大丈夫だ。
絶対に本堂には、入れさせない。
お前達は、本堂の廊下で待ってな」

本堂を囲む廊下。
確かにそこなら、雷は無理だが、雨はしのげる。
とりあえず、そこでしゃがんでいれば安全という事で、私達は雷が過ぎるのを廊下で待つことにした。

その時だった。

ミシリッ

廊下の向こう側から、何かが軋んだ音がする。
見てみると、向こうのほうにある廊下の板が、弧を描くようにひん曲がっていた。
まるで、重い何かが乗ってるかのように。
それは除々に大きくなり、やがて「バキッ！」という音と共に折れてしまった。
やがて、折れた板の一つ手前の板が除々に曲がり始め…。

いずれ、私達の所に辿り着くのは、容易に想像できた。

「どうしても、中に入れたいらしい…」
居候は、上田さん、服部さんと見渡すと、最後に私を見つめ、
「絶対にオレから離れるなよ」
と、言った。
私達は、静かに頷いた。

扉は、簡単に開いた。
中はホコリっぽく、真っ暗だ。
上田さんが、懐中電灯を取り出し、室内を照らしだす。
闇に一筋の光が射し込み、中の様子が浮かび上がった。

埃まみれの畳。朽ちた障子。
寺の本堂ということもあり、眼前には仏が鎮座している。
一足踏み込むと、やはり屋内は結構傷んでいるのか、ギシギシと床が音をたてる。

「こえ～な～。
やっぱ、懐中電灯と闇の組み合わせは最強だな。
これだったら、明かり無い方が怖くないんじゃないか？」
居候が軽口を叩き、場を和ませようとする。
もちろん意味は無く、みんなの顔は強張ったままだ。

４人で固まり、堂内を探索していると、中はあまり広くないことに気付く。
仏像のある部屋こそ広いが、後は四畳程度の部屋と押入れがあるだけだ。
ほとんど何もない。
あるのは、私達が残した足跡だけ。

ふと、急に目の前が揺らぎ、立ち眩みがした。
あれ？と、思うが、さらに耳鳴りがしだし、私は頭を押さえる。

鬼…子う……

また、あの歌が聞こえる。

どんどん耳鳴りが酷くなってくる。
目の前が、フラッシュを発かれたみたいに明滅を繰り返す。
耳を貫くような激痛が走り、私は膝から崩れ落ちた。

…

暗い…。

とても暗い場所…。

誰かの声が、聞こえてくる…。

―　我らが寺には、女しかおらぬゆえ、男のかたはご遠慮頂くことになっております　―

目の前に、少しづつ景色が広がっていく。

少しモヤがかかっているけど、まるで映画を見ている感覚。

人の良さそうな尼さんが…。

―　男は、老いても男

抵抗される危険がある　―

寺に、お婆さん達を集めて…。

―　刀を持っておれば、斬りとうなるのが武人の性　―

偉そうな侍と一緒に…。

―　死にとおない…死にとおない…　―

まるで、遊んでいるかのように…。

―　キリキリ働くんだよ！怨むなら、親を捨てた子を怨みな！　―

こき使ったり、刀で斬り殺したりしている…。

―　何の詩じゃ、あれは？　―

これが、養老院の真実…。

―　何の楽しみもなく働かすのは不憫
　わらわが、詩を作って差し上げたのです　―

歌が…歌が聞こえてくる…。

―　余生にすがる穀潰し
　刀や鞭を受けよとも
　御上を怨む事は無し
　鬼の子産んだ我が罪ぞ　―

…

「あぁぁぁぁ…」
涙が止まらない。

「おい、マナカ！どうした！」
居候が、私を抱きかかえ、揺さぶっている。
その言葉に応えようとするが、声が出ない。
「貧血ですかね！？
　とにかく、頭を打ってないか確認をしな…」

ミシッ

「…え？」
床の軋む音が、肌を通し聞こえてくる。

足を擦るように歩きながら、私達に近付いてくる。
「…来たな」
居候が、身構える。

ミシッ…ミミシッ…ミシッミシミシシッミミシッ

「お、おい。ちょっと、多くないか！？」
床の軋む音が近付くにつれ、細い枯れ木のような足が、杉林のように沢山立っているのが、ぼんやりと見えてきた。

「か、隠れましょう！」
服部さんが、押入の襖を指さし、中でやり過ごそうと襖を開ける。

「ひぎゃあぁぁぁぁぁぁ！！」
開けた瞬間、服部さんは絶叫をあげ、腰を抜かした。
押入の中には、老婆が隙間無く敷詰まっていた。

「見えてるか！？兄ちゃん！」
「は、はい。お、おばあさんが…」
「念が強すぎるのか…。
　オレにも、しっかり目視出来る」

床を鳴らす音が近付き、老婆達が姿を表す。
扉側、そして、押入から這いだす老婆達に囲まれ、私達は、まさに四面楚歌だった。

「おい、マナカ！しっかりしろ！」
「あぁぁぁ…」
私を、揺すり起こそうとする居候に何とか返事をしようとするが、やはり声が出せない。

悲しくて寂しくて仕方が無い。
この感情が、私のモノなのか、老婆達から来るものなのか、私にはわからない。

居候が私の前に庇うように立ち、老婆達に向かって叫ぶ。
「お前らを縛ってるのは、何だ！？
憎しみか！？悲しみか！？
お前達を苦しめた奴等は死んだ！
もう、終わったんだ！」
必死に説得しようとする居候。

しかし…。
「クソッ！止まらない！」
老婆達が、歩みを止めることはなかった。

そう…。
この憎しみは、止まらない。
この悲しみは、終わらない。

「…仕方が無いか」
何かを決心した目で懐に腕を差し入れ、何かを取り出そうとした、その時だった。

「もういやだあぁぁぁぁぁ！」

服部さんが恐怖に耐え切れなくなったのか、手を振り回しながら老婆達に向かっていく。
どうやら、強行突破で外に出ようとしているらしい。

しかし、手を伸ばす老婆を避けようとして転び、あえなく老婆に囲

まれ動けなくなってしまった。

「…ああ、こりゃ駄目かも」

居候は、服部さんを助けるのを諦め、すでに傍観者となっている。

服部さんに、一斉に手を伸ばす老婆達。

「お」

焦点の定まらない顔で、服部さんが呟く。

「お？」

居候が、聞き返す。

「お、お、お、お、お、お……」

あぁ…とうとう壊れてしまった…と、二人は哀れみの目で眺めている。

やがて、彼は叫んだ。

「お母ちゃあぁぁーーーーぁん！！」

その叫びに、老婆達の動きが一瞬止まる。

「おがあぢぁぁーーーーぁん！！」

なおも、母親を叫び続ける服部さんに、老婆達は近寄って行き様子を伺う。

やがて老婆達は、服部さんを取り囲んで座りだした。

一人一人が、服部さんの顔を覗き込む。

そして、体を震わせたかと思うと、顔を覆って泣きだした。

「おい！逃げるぞ！」
居候が私を担ぎ上げ、上田さんに叫ぶ。
「あ、あの人は？」
「ほっとけ！」

私は、走り出す居候に抱きかかえられながら、服部さんを抱き締め、一人、また一人と泣きながら消えていく老婆達の姿を見ていた。
閉じられていたはずの門も、いつの間にか開いており、三人は倒れこむように門の外に出る。
肩で息をしながら、上田さんが聞いてくる。

「あの人、置いてきて大丈夫なんですか？」
「多分、大丈夫だろ。
どうやら、彼女たちを縛っていたのは、憎しみでも悲しみでもないらしい」
「…え？」
「子供に会いたいという、たった一つの思いだったんだ。
たとえ、自分を捨てた子だったとしても」

きっと母を呼び、泣き叫ぶ服部さんに、我が子の影を見たのだろうと彼は言った。

「子供を恨む親はいない…か」

そう呟く居候の言葉を最後に、私の意識は途絶えた。

気が付いた時には、私は居候の背中にいた。
「気が付いたか？」

どうやら居候は、私を背負って下山している途中のようだった。
周りを見回すと、下山しているのは私達3人だけのようで、服部さんはいなかった。

「案外軽いんだな。
これなら、いくらでもおんぶしてやれるぜ？」
「…えっち」

私は、私を背負い下山してくれていることを心の中で感謝しつつ、背中に顔をうずめた。

「さあ、急ぐか。
雨が降りそうだ。…恵みの雨が」

そして、私はもう一度眠りについた。

家に帰ると、家族総出の大説教大会が待っていた。
祖父は怒り、母は居候を労い、父は黙り、妹達は泣き、祖母はニコニコ笑っていた。

「一応、解決しました。
まあ、俺のおかげじゃなく、市役所の服部さんのおかげだけどな」と、報告を済ませた居候。
帰りぎわ、「好奇心も良いけど、お前は生き急ぎ過ぎだ」と、注意された。

その服部さんだが、あの後、本堂で気絶してたのを業者の人によって発見されたらしい。
それから数日後、彼は行方不明となった。

そのことを、居候に聞いてみたのだが…。
「霊の仕業じゃないよ。おそらくは別件」
彼は、それ以上語ることはなかった。

それから数ヵ月後、廃寺は撤去され、無事施設は建てられる事になる。
その建てられた施設が、老人ホームだというのは、なんと皮肉な事だろうか。

＃０４　養老院の姥捨て山　（下）（後書き）

実はこの話、もう一つの話が同時進行しています。
その話の主人公は、服部さん。

あえて語りませんが、ここに二つの疑問点を提示します。
この二つをヒントに推理して、隠されたもう一つの物語を推測してみてください。

疑問点１
服部さんは、自分の部署の仕事ではないにも関わらず、何故あんなに必死だったのか？

疑問点２
埋められた死体の死因は何だったのか？

この他にも、探せば疑問点があるかもしれません。
きっとそれは、もう一つの物語のヒントになることでしょう。

#05　無神論者の幽霊　（前）

「肝試し？」
学校から帰るなり、私は居候の部屋へと訪れ、相談を持ち掛けていた。

「また、ずいぶん季節外れだなぁ。冬近いぞ、冬」
あぐらをかき、半分呆れ顔で聞いている居候。

その様子に、交渉失敗の予感がしながらも、私は話を続ける。
「クラスメイトが引っ越すことになって、最後の思い出作りをしようってことになったんです。
それで、クラスにオカルト好きな男子がいて…」
「…はぁ」
溜め息がもれる。

それでもへこたれずに、話を続ける。
「未成年だけで夜出掛けるのはマズイってことで、一応保護者を立てようということになって…。
それで、優子があなたのことを話しちゃって…」
「若いってのは、凄いねぇ。
くだらないことに、ここまで情熱を傾けれるとは」
「…くだらないって、今まで散々オカルトに首突っ込んでたじゃないですか」
「肝試しほど、くだらないものはないよ。
散々調子に乗って、いざ取り憑かれたら泣きつくんだろ？」
「う…」
やれやれというような顔。

「で？何処に行こうっての？」
「えっと…、確か、カミナ町という町だったと思うんですけど…。
雑誌に載ってたし、近いしってことで。
でも、近くにそんな町ありましたっけ？」
「やめとけ」
居候は、モモに頬杖を突きながらそう言った。

「カミナじゃなくて、カンナ。
カンナ町っていうのは、正式な名前じゃなくて通称みたいなものさ。
今は、合併して高枝市だったかな？
神が居ない町と書いて、神無町」
「神が居ない？」
コクリと頷くと、少し姿勢を正した。

「日本って国は、神の国と昔から言われている。
その理由は、八百万の神といって、全てのモノには神が宿り、何処に行っても何かの神様がいるとされているからなんだ。
だが、神無町には神がいない。
昔、ある事件があって、そこにいた神々が逃げ出したらしい」
「事件？」
「…詳しくは知らない。
だが、あそこに近付いてはいけない」
目を閉じて、首を振る。

「その事件があってから、多くの人間があの町を去った。
信心深い人はもちろん、あまりそういうのを信じない人まで。
今、あそこに住んでいるのは、ごく少数の日本人と外国人労働者さ」

そんな町が、この近くにあったなんて知らなかった。
高枝市といえば、電車で二駅の場所だ。

「かなり治安も悪いし、事件も起きている。
近付くなっていうのは、そういう意味でもある」
「…治安が悪いってのは、分かりました。
でも、神様が居ないって、何か不都合でもあるんですか？」
「そこで死んだ人間は、成仏が出来ないらしい。
死ねば、そこを彷徨い続ける。
…神無町という土地のせいなのか、あるいは、そこにいる人間に問題があるのか」

そこまで言うと、何かを思い出したかのように、話し出した。

「こういう話を知っているか？
世界一治安の悪い街、ヨハネスブルグ。
そこでは毎日、人殺しが行なわれている。
神も仏もありゃしない。
警察も大変さ。

それで、警察が犯罪者の取り調べをする訳だけど、その犯罪者達の供述がおかしいんだ。
ある男は４人、人を撃ったと供述したが、実際の被害者は３人だった。
また、ある男が７人殺したと言ったが、死体は４人分しか見つからなかった。
おかしいだろ？
被害者を多く言っても、なんのメリットもないのに。
あまりにそういう事が多いから、犯罪者に殺した人数を聞くのはタブーとなっている」

「…幽霊を殺してたって事ですか？」
そう私が聞くと、手を拡げ肩をすくめ、「さぁ？」と、答えた。
「神に見放された土地ってのは、死者が縛りつけられる、この世の地獄なんじゃないか？」
殺されても成仏出来ず、幽霊になってもさらに殺され続ける、無限地獄のような異常な世界。
そんな場所が、本当にあるというのだろうか。
「…ということで、却下」
彼はそう言うと、私に背を向け寝息を立てた。
うーん。
はたして、みんなが言うことを聞いてくれるかどうか…。
私は、憂鬱な気持ちになりながら、居候の部屋を後にするのだった。

翌日。
学校へと列を成す高校生集団に飲みこまれながら、私は、昨日のことをどう説明すべきか考えていた。
オカルト好きに昨日の話をして、本当に中止に出来るのだろうか…？
寧ろ、逆効果な気がする…。
治安が悪いと言ったとしても、案外恐いモノ知らずなところがあるし。
…うーん。
結局、学校に着いても答えが出なかった私は、しかたないので話の

流れにまかせることにした。
きっと、何とかなる…はず。

教室に入り、席につくと、さっそく一人の男子生徒が話しかけてきた。
「水無瀬！許可取れたか？」
「…それが、断られてしまって…」
「そっか～…」
男子生徒は、目に見えて落胆の表情を浮かべる。

彼が、この思い出作りの発案者である、同じクラスの山田君だ。
大のオカルト好きで、雑誌に載っていた心霊スポットなどを、親友の佐野君を引き連れ歩き回っている。
もっとも、佐野君はあんまり乗り気じゃないみたいだが。

こちらの会話を遠巻きに眺めていたその佐野君に、山田君が近寄り話しかける。

「佐野の兄貴も、やっぱ駄目なの？」
「…うん、無理。
てかお前、水無瀬さんに呼び捨てとかスゲエな…」
「え？なんで？」
「なんでって…お前…」

二人して、こちらを見てくる。
どう反応したらいいのか困る。

「山田って、誰にでもああいう感じだよね」
「あ…優子」
いつの間にか女の子が二人、私の席の前に立っていた。

「お嬢で高嶺の花のマナカにも、ああだもんね。
…そういう所を好きになったの？美樹は」
「っ！？もう、優子！」

ケタケタと笑いながら、優子が美樹をからかう。
美樹は、ふくれっ面をしながらも、何だか楽しそうだ。
じゃれ合っている二人を見ながら、私は少し感傷的な気分になっていた。

優子は、幼稚園からの幼馴染みで、少し男勝りな所がある女の子。
男子、女子共に人気が高く、私の一番の友達だ。
美樹も、小学校からの友達で、小さくて可愛い私達のマスコット的な存在。
そして何より、遠くに引っ越してしまう張本人。

思い出作りも元はといえば、三人で話し合っていたことだ。
その話を聞いていた山田君達が、「なら、肝試ししようぜ！」と、割り込んできたのだ。
最初は、「肝試しとかっ！無いわっ！」と、優子と二人で笑っていたのだが、美樹が顔を赤らめながら言った、「…面白そうだね。…肝試し」と、いう、鶴の一言で即決定してしまった。
そして、今に至る訳だ。

「しゃーない。俺達だけで行くか」
そう提案してくる山田君に、優子達も、仕方無いかと、頷く。

「夜遊びする事になっちゃうけど、最後くらいは…ね？
男子！ちゃんと、私達を守りなさいよ！」
「…お前、オレ達より強いじゃん」

「佐野おぉぉー！」

優子が、佐野君を追い回す。
実に、見馴れた光景だ。

そんなことより、まずい流れだ。
完全に、行く方向になっている。

優子の佐野狩りを眺めながら、どう切り出そうか悩んでいると、意図せずしかめっ面をしていたのか、優子が佐野君の耳を引っ張りながら近付いてきた。

「マナカは、やっぱり厳しい？
出来るだけ、早く帰るつもりなんだけど…」
「いや、それは大丈夫なんだけど…」
「けど？」

みんなが、美樹のために何かをやろうと思ってくれるのは、素直に嬉しい。
美樹の好きな人からの提案だというのなら、なおさらだ。
でも、危険が伴う思い出作りなら、やめておくべきだ。

行く気満々の彼らを、波風立てずにどう止めさせるべきだろう。
そのままの理由を言っても、きっと理解されないだろうし、逆効果かもしれない。

…そうだ。

治安が悪いのなら、事件が新聞記事になっているかもしれない。
それを見せて、諦めさせよう。

そう思いついた私は、みんなに返事を少し待って貰い、事件の記事を探すため、久しぶりに図書館へと足を運ぶことにした。

その日の夕方。
私は、図書館へと訪れていた。

久しぶりに来た図書館は、相変わらず木と本の匂いがして、なんだか落ち着いた。
前来たのは去年の夏休みで、避暑地として利用している人が多かったが、暑さが落ち着いたせいか、今は利用者が少ないようだ。
変わった場所はあまり無いが、注意の張り紙が少し大きくなったような気がする。

張り紙には、「本は、大事に扱いましょう」と、書かれている。
「本を乱暴に扱う人が増えたのかな？」と、悲しく思っていると、その文の続きが目に入った。

「特に寄贈された本は、入手が難しく…」
私は、見なかったことにした。

古い新聞が並べられているコーナーにたどり着くと、新聞が、前に比べて少なくなっているのに気付く。
どうやら、古い新聞はデータベース化され、パソコンで管理されているらしい。

私は早速、最近やっと出来るようになったブラインドタッチで、得意気に検索ワードを入力してみる。
やがて、検索結果として現れたのは、１５０件を超す事件記事だっ

た。

「治安悪化憂れう。またも、外国人による傷害事件」
「ガソリンかけ、火をつける！２８歳男を逮捕」
「ひと月に路上強盗３件。市民の不安つのる」

ゾロゾロと物騒な記事が出てくる。

自分が想像してた以上の、事件の多さと治安の悪さ。
居候が言ってたのは、本当だったんだ。
この記事を見せれば、きっと肝試しを中止に出来る。
そう思った私は、数件記事を抜粋した後、プリントアウトしてファイルに閉じた。

一仕事終えて図書館を散策していると、見覚えのある雑誌の表紙が目に止まった。

あれ？
これ、前に山田君が持ってきてた雑誌？

そこにあったのは、肝試しの場所を決める時、山田君が持ってきていた少し古い雑誌だった。
どうやら、この図書館には雑誌も置いてあるようだ。
そういえば、子供コーナーには、漫画が置いてあったような気がする。
何とも自由な図書館だ。

好奇心にかられ、数冊雑誌を手に取ってみる。
山田君が言うには、結構古く、今は廃刊しているため、手に入れることが困難な雑誌らしい。

現に山田君は、あの時持って来ていた、２０００年7月号しか持ってなかった。
しかし、目の前にはその貴重な雑誌が、重複無しで２０冊ほどある。
案外、穴場というのは、身近にあるようだ。

早速、神無町に関しての記事を探してみる。
情報は、あって困るものじゃない。

何冊かは空振りに終わってしまうが、次に手に取った２０００年１０月号。
２、３ページめくったところで、『特集』という大きな文字と、『カンナ町の謎に迫る！』という文字が、目に飛び込んできた。
心の中で、ガッツポーズをとりつつ、詳しく読んでいく。
その特集とは、神無町に半年に渡って滞在、調査するという、非常に物好きな企画だった。

私は、その１０月号から順に数冊取ると、テーブルに移動し、その企画のページを開いた。
どうやら、私も物好きらしい。

記事は、『カンナ町は実在した！Ｈ県Ｓ町』から始まり、
『神無町の真実！裏に謎の男！』、
『次々起こる怪奇現象！調査断念も』と続く。
滞在記として、事細かに書かれているその内容は、非常に面白く興味深かった。

記事を読み終え、次の号で続きを探す。
しかし、どういう訳なのか、次の号には続きが載っていなかった。
休載なのかと思い、先の号を調べてみるが、次の号にも神無町の”か”の字も出てこない。

その沈黙は、廃刊まで続いた。

どういうことだろう。
まさか、神無町で何かあったのだろうか。
いや…でも、雑誌の話題作りとも考えられる。
しかし、企画が断たれて以降、記事どころか話題にも触れられない事には、何か違和感を感じた。

やはり、何か嫌な感じがする。
神無町には、行くべきじゃない。
私は、改めてそう決意し、図書館を後にするのだった。

翌日。

私は、みんなに図書館で調べた記事のコピーを見せると、この場所がいかに危険な場所かを説明した。
女子二人は、事件の新聞記事を見て、明らかに引いている。
男子もさすがに、困惑しているようだ。

うまくいくはずだった。
…彼が現れるまでは。

「あのさ〜。オレ、その町に住んでるよ」
隣のクラスのイケメン風の男子、渡辺君だ。

「それ、数年前の記事だろ？
今は、別に事件とか起こってないよ。外国人は多いけど」
「え？そうなの？」
「うん。トラブルっていったら、外国人が公園でバーベキューして

るくらいだと思う」

確かにここ最近は、前に比べて、事件の記事はかなり少なくなったように思う。
でも、少なかろうが大きな事件は起きてるし、危険なのは何ら変わりない。
そもそも、長年治安が悪かったのに、急に治安が改善されるものだろうか？
新聞も、全ての事件を載せてる訳じゃないし、わざと載せないこともありうる。

そんな疑問を口にするも、
「心配性なんだよ、水無瀬さんは…。
　現に、オレやオレの家族はあの町で普通に暮らしてるし、事件なんて、どこででも起きてるでしょ」
と、反論される。

相反する二つの意見。

優子と美樹は、私の意見に賛同してくれたが、山田君達は決めかねているようだ。
多数決なら、もちろん私の勝ちだ。
だけど、例え今回中止になったとしても、山田君達だけで行くということになれば、まったく意味が無い。
私にとっては、全員に行かないと言わせることが、本来の目的なのだ。

しかし、山田君達が出した答えは、私にとって望まないモノだった。
「住んでる渡辺が安全だって言ってるんだから、大丈夫だろ」
「え…。で、でも…！」

「大丈夫だって！ちゃんと、気を付けるから！」
頼りない力こぶを見せながら、山田君が笑う。
気を付けるとか、そういう問題じゃないと思うんだけど…。
動揺する私に、さらに渡辺君が畳みかける。
「大体水無瀬さん、ちょっと失礼だよ。
目の前の人間が住んでる町なのに、危険な町って…」
「…え？…あっ…ゴメン」
自分が、失言していた事に気付く。

「まあ、水無瀬も悪気無かったんだし許してやれよ。
水無瀬も、もういいだろ？」
「…」
失言による罪悪感から、完全に気勢をそがれた私は、次の言葉を紡
錘ぐ事が出来ない。
結局、結論は後日という事になり解散となった。

「はぁ…。情けない…」
話し合いの後、溜め息をついてると、優子に肩を叩かれた。
「マナカ。
あんたが必死に止めてるって事は、何かあるんでしょ？
私も美樹も、あんたが行くなって言うんなら行かないよ。
でも、アイツらは多分行く。
そうなると美樹が心配して、山田達について行くって、言い出す
かも。
…ねえ、やっぱりもう一度、マナカん家のアイツに頼んだ方が良
いんじゃない？」
結局、居候に頼るしかないのか。

私は、自分の不甲斐なさに、心底失望した。

その日の夕方。
落胆して家に帰ると、居候が「ん？どしたの？」と声をかけてきた。
事の顛末を話すと、眉間にしわを寄せ、難しい顔になる。

「その渡辺って子は、すぐに引っ越したほうがいいよ。
手遅れにならないうちに。
事件が少なくなったからといって、治安が良くなったとは限らないよ」
「…じゃあ、まだ危険ってことですか？」
「うん。語弊があるかもしれないけど、潜伏期ってとこかな。
多分、数年前、分譲住宅が安く売り出された時に、引っ越して来た連中じゃないのかな。
じゃないと、正気じゃない」

…やっぱり、危険なのか。
優子の言うように、居候に付いて来て貰ったほうが良さそうだ。
でも、一度断わられたし…。
どう切り出そう…。

「それで、あの…」
「まったく…。
しょうがないねえ、お前達は」

居候は、よっこらせと立ち上がると、押入れを探り、キーホルダー付きの鍵を取り出した。

そして、鍵を指先でくるりと回すと、

「付いて行ってやるよ」
と、私に笑いかけた。

#05　無神論者の幽霊　（前）（後書き）

#05　無神論者の幽霊　（後）に続きます。

＃０５　無神論者の幽霊　（後）（前書き）

＃０５　無神論者の幽霊　（前）の続きです。

＃０５　無神論者の幽霊　（後）

神無町肝試しの当日。

空が赤く染まる中、私達は、私達の町より駅二つの高枝市にやってきた。

男子高校生二人に女子高生三人、そして、大人一人の大所帯。

暮れなずむ空に、高校生達の声が響く。

「はぁ、はぁ、ひぃ…！

な、何で、私達自転車で来てんの！？普通、車でしょ！？」

「おいおい、大人がみんな車を持ってると思うな。

維持費、駐車料金、保健諸々、色々かかるし大変なんだぞ。

第一、オレは居候な訳だしな！」

威張る事じゃない！と、心の中で叫ぶ。

車を期待していた優子は、まだ納得出来ない様子で、さらに居候にからむ。

「マナカの家で、車借りればいいじゃない！」

「何言ってんだ！

そんな事したら、事故した時に色々大変だし、水無瀬家に迷惑かける事になる。

第一、オレは車の免許持ってないしな！」

またも、威張りながら言う、居候。

しかし、一々反応してたらスタミナが持たないと思い、流すことにした。

その後も優子は、
「大体、何で自転車の鍵にキーホルダー付けてんのよ！
おもいっきり、車輪に揉まれてるじゃない！」とか、
「佐野ぉ～。後ろに乗せてぇ～」
などと、騒いでいたが、結局バテたのか、休憩地点に着くまで黙り込んでいた。

神無町の手前で、私達は自転車から徒歩に切り替えた。
山田君が言うには、「そのほうが雰囲気が出るから」とのことだった。
しかし、目的地である神無町に近付いたにも関わらず、雰囲気どころか、普通の町の風景に、ただただ一本道が続いているだけだった。
渡辺君が言っていたように、やっぱり心配し過ぎだったのだろうか。
そう思い居候を見ると、少し顔が険しくなっているような気がした。
そんな居候に、山田君が話しかける。

「あの、神無町に詳しいんっすよね？
オレ達、雑誌でしか情報を集めれなかったんで、幽霊が出るってことぐらいしか知らないんっすよ。
水無瀬が言うように、本当に恐ろしい場所なんすか？」
「…神無町の本当の名前は、今はもう地図には載ってない。
数年前、市町村合併されたんだ。
表向きは、助成金目当てだと言われていたが、実際のところは、町の名前を消し去りたいからだ、という話だ」
「…地図上から消された町」
「合併後一時期、神無市と書いてカミナシと呼ばれた事もあったが、市からの猛烈なクレームがくるという理由で、雑誌等では現在でも

神無町で統一されている。
　そのほうが、場所を有耶無耶にしやすいだろ？」

そこまでして、縁を切りたい町だとは…。
さすがの山田君も、大物に出くわし、戦慄を受けているようだ。
ワナワナと震えるその両手は、恐れなのか、武者震いなのか…。

「で？どんな幽霊が出るんだっけ？」
佐野君が、震える山田君に声をかける。。
その声で、ハッと我に返り、「あ…ちょっと待ってて」と、カバンを探った。
そして、一冊のノートを取り出す。
ノートは、原型を保ってないほどに膨れ上がっており、新聞記事や雑誌の記事がスクラップしてあるようだった。

「え～と、ビルから、飛び降り続けるサラリーマン。
　道路脇で、謝り続ける少年。
　夜道で、悲鳴を上げ続ける女性。
　…あ、そうそう。
　取材に来た、雑誌記者の幽霊が出るっていう噂もあるな」

その話を聞いて、図書館で見た雑誌の特集を思い出す。
パタリと報告されることが無くなった、神無町滞在記。
もしも、あの記者の、末路だったとしたら…。

「それがさ、噂によると雑誌の取材で神無町に来てた記者が、この町で殺されちまったらしいんだよ。
　その後、幽霊になって町中を徘徊し続けてるって噂」
「殺されたって、幽霊に？」
「さあ…」

はっきりしない口調で、口を濁す。
やっぱり、噂は噂か…。

「それにしてもさ…。
神無町の幽霊って、全部『続ける』っていう言葉が付いてんのな」

確かにそうだ。
サラリーマン、少年、女、記者、全てに『続ける』がついている。
居候が話していた、この世の地獄の話が頭をよぎる。

死んでも縛り続けられる、無限地獄。

その話が、説得力を増してくる。
私達は、本当にそんな場所に行ってもいいんだろうか…。
私は、少し迷い始めていた。

やがて、空は闇に染まり始め、家や街灯に灯が灯り始めた。
さすがにこの時刻ともなると、普通の町でも少し不気味な雰囲気が出てくる。

歩き始めて、もう15分になる。
そろそろ優子が、ボヤき始める頃だ。
そんな事を思っていると、それまで黙っていた美樹が、そそくさと居候に近付いて行った。

「あの…、マナカとは、どういう関係ですか？」
「ん？どうって？」
「一緒に住んでるんですよね？」

興味津々で、美樹が居候に問いかける。
こんな時に、よくそんな話が…。
そう思いながら、苦笑いしていると、佐野君が、
「水無瀬さんの許嫁って、その人なの？」
と、質問をかぶせてきた。
その瞬間、優子がピクリと反応する。
「…その話はするな」
優子が、佐野君を睨みつける。
「えっ！？
お前が、散々言い振らしてたんじゃん！」
「うるさいっ！佐野黙れ！」
優子が、佐野君に襲いかかった。
「り、理不尽だー！」
夜の町に、憤怒の叫びと悲痛な叫びがコダマする。
近所迷惑だ。
「…マナカ。何かあったの？」
美樹が、私の隣りに来て、事情を聞いてきた。
「断わられたの。向こうから」
「え？あ、ごめん…」
「ううん、全然。ろくに、会ったこともなかったし」
落ち込む美樹を慰めながら、チラッと、居候の様子をうかがってみる。

居候は、頭の後ろで手を組んで、興味無さげだ。
その様子に、何故だかムッとする。
少しくらい、気にしてくれてもいいのに。

闇が、すっぽりと町を覆う頃、私達は目的地の神無町へと辿り着いた。
目の前には、今までと同じ、ごく普通の町の風景。
だが、先入観のせいか、空気が重く、闇が少し深くなったような気がした。
道路脇には、『ようこそ』と書かれてある朽ちた看板が、ここが町境だと主張している。

嫌がおうにも、緊張が走る。
ただ一人、山田君だけは、いよいよということでテンションが高めだ。
その時だった。

「ここまでだ」

居候が、神無町との町境直前で、私達を手で制止した。
「え！まだ、神無町に入ってないじゃん！」
当然、文句を言う山田君。
だが居候は、そんな山田君の言葉に聞く耳持たず、ここまでと言い張る。

「折角、ここまで来たのに」と、他の人も不満を口にする。
でも、みんな、どこかホッとしたような顔になっていた。
しかし、山田君だけは、物凄い勢いで文句を言っている。

その時、
「待って！」
美樹が、急に声を張り上げた。
何事かと、美樹に注目が集まる。

「あれ…」
みんなが一斉に、美樹の指さす方向を見た。

神無町の町境を越えた、さらに向こう。
外灯もなく真っ暗な道路脇に、青白く光っている物体がある。
よく見ると、人の形をしていて、身長と服装から、小学生位の男の子のように見える。
結構遠くにいるにも関わらず、ハッキリと見えるその姿。
彼は何事かを、絶えず呟いている。

ゴメン…ゴメン…

何かに対して、謝り続ける少年。
声が、ここまで届くはずもないのに、しっかりと、確かに聞こえてくる。

「道路脇で、謝り続ける少年！」
山田君の顔が華やいだ。

興奮した彼は、急いでカバンに手を入れ、カメラを引っ張り出す。
カメラを構え、シャッターを切ろうとした瞬間、居候が山田君の手を掴んだ。

「何やってんだ？」
「写真を、撮ろうかと思って！」

「やめろ」
「でも、証拠を撮らなきゃ、自慢出来な…」
「やめろ」

静かな、それでいて迫力のあるその言葉に、山田君は押し黙り、そして、渋々従った。
その時、少し見えた居候の横顔は、何故だかとても痛々しくて、悲しげに見えた。

目の前に広がる、非現実的な光景。
霊能力を持たない私達が、今、幽霊を目の前にしている。
町境を越えた向こうは、無限地獄。
あの少年は、永遠にここで謝り続けるのだろうか。
居候が見せた横顔の意味が、なんとなく、分かったような気がした。
それからしばらくの間、私達は延々と謝り続ける少年を、哀れみと畏怖の入り混じった眼差しで眺め続けた。

帰り道。

私達は、本物の幽霊を見た高揚感を保ったまま、家路についていた。
ただ一人、山田君は、やはり不完全燃焼なのか、少しスネ気味だった。

「なんか、中途半端になっちゃったな…。
　これで、思い出作りも終了か…」
ガックリとうなだれ、残念がる山田君。
そんな彼を、美樹がやさしく慰める。

「ありがとう山田君。私は嬉しかったよ。
私にとっては、最高の思…」
「…まあ、しょうがないよな。
心霊スポットは他にもあるし、また今度行けばいいや。
じゃあな、元気でな」

あっけらかんと、美樹に言い放つ山田。
最初、驚いたような顔をしていた美樹だったが、みるみる目に涙が溜まっていく。

「へ！？なんで、泣くんだよ？」
「ちょっと、アンタ！
美樹の気持ち、少しは考えなさいよ！」
優子が、山田に詰め寄る。

「え？何？どういうこと！？」
山田は、何故責められているのか、分からない様子でオロオロしている。

美樹は、本当に山田の事が好きだった。
本当は怖がりなのに、肝試しにも賛成してたし、今さっきだって、自分が辛いのに山田を慰めようとしていた。
好きな人と、別れなきゃいけないのに…。
二度と、会えないかもしれないのに…。
そう思うと、美樹がいたたまれない。

「アンタ！
変に飾らないから良い奴だと思ってたけど、ただ単にガキだっただけみたいね！
美樹が、アンタに誘われた時、どんなに嬉しそうにしてたか…」

優子も、泣きそうになりながら、叫んでいる。

「えっ！？
だって、別に二度と会えない訳じゃないじゃん！
引っ越し先の新見市っていったら、うちのバアちゃん家近いし、
オレは年に３度は会えるぜ！？
夏休みは、いつもあっちに半月ほど居座ってるし…。
その間なら、毎日でも会えるぜ？」

「…へ？」

三人で、顔を見合わせる。

「え？
じゃあ、アンタ、美樹ともう会えないって訳じゃないの？」
「うん、当たり前だろ？」
「そういう事は、先に言いなさいよ！
…アンタ、バカじゃないの！？」
「え！？なんで！？」

涙と笑みが、こぼれ落ちる。
美樹の悲し涙は、いつしか、嬉し涙に変わっていた。

「ほれ…！」
優子に小突かれ、美樹の前に押し出される山田君。
涙を流す美樹を前に、少し考え込むが、意を決して、少し照れながら言った。

「正月、バアちゃん家行くからさ…、初詣一緒に行こうぜ！」
「…うん！」

それを聞いて、美樹は、今までに見せた事の無いような、魅力的な笑顔で笑った。

こうして、私達の肝試し騒動は幕を閉じた…

…はずだった。

「おい！隣のクラスの渡辺が大変だぞ！」

あれから一週間後。

突然、山田君がそう叫びながら、教室に駆け込んできた。

たしか渡辺って人は、隣のクラスのややイケメンの男子だったはずだ。

「オレ達、神無町の幽霊見ただろ！？

だからオレ、あの後、渡辺に言ったんだよ！

あそこはヤバい！まじで出る！引っ越したほうが良い！って。

そしたらあいつ、鼻で笑ってさぁ…」

その態度に腹を立てた山田君は、勝手にしろ！と、言って、放って置いたそうだ。

それから、5日後の今日。

隣りのクラスに行くと、机に突っ伏し、真っ青な顔をしている渡辺君を見かけ、思わず声をかけたそうだ。

すると…。

「いつも、公園でバーベキューしてた奴ら…。
やってたの、バーベキューなんかじゃなかったんだ！
集まってた人間も、人間じゃなくて…！
…いや、人間もいて…う…うう…。
オレの家族…かぞ…かぞく…かぞ…くぅぅ」

そこまで言うと、再度机に突っ伏して、そのまま動かなくなったらしい。
その様子に異変を感じた山田君は、他の人に先生を呼びに行って貰い、声をかけ続けたそうだ。
だが、ブツブツ呟いているだけで、埒があかなかった。
そこで、私達に応援を求めるため、戻って来たのだそうだ。

私達は、お互いに頷くと、教室を飛び出した。
しかし、次の瞬間、私達が見たものは、先生達に囲まれながら教室を連れ出される渡辺君の姿だった。

「誰もいない…。最初から、誰もいなかったんだ！」と、叫ぶ渡辺君の声に、「何故、学校に来させたのか！」、「カウンセリング！心療内科の電話番号！」と、いう先生達の怒号が交じり、まさに、修羅場の様相を呈していた。

私達はその様子に、ただただ立ち尽くすだけだった。

学校から帰った後、居候に学校であった事を話すと、
「錯乱してる。
相当、ショックな事があったらしいな」
と、彼を哀れんだ。

「…確か、そいつの名前、渡辺だったよな？」
テーブルに置いてあった新聞に手を伸ばし、パラパラとめくりだす。
やがて、何かの記事を見つけると、「…なるほどな」と、一人で納得している居候。

私もと、新聞を覗き込もうとすると、
「見るのはやめとけ。ショッキング過ぎる」
と、止められた。

「確かに近年、あの町は事件が少なくなっている。
でも、それはただ単に、人口が減っているだけなんだ。
人が減るたびに、事件は減る。
だが、治安は悪くなる」

「え…？」と、不思議そうな顔をする私に、理解出来てないのを悟ったのか、新聞を畳んで話し出した。

「例えば、悪玉菌と善玉菌があるとする。
もし、悪玉菌が善玉菌を食べるとするならば、結局、最後には悪玉菌しか残らない。
全体的な数は減り、悪玉菌の密度は濃くなる」

何故、菌類に例えたのか分からないが、何となく言いたいことはわかった。
全体数が減るから、争いの数は減り、一見平和そうに見える。
でも、中味は結局、悪玉菌だらけということだ。

「そんな町で、生きようとする奴がいるか？
ある意味、自業自得だ」
「そんな、言い方…」

「改善される見込みが無い場所に、住むのは大馬鹿だよ。
ただ、悪玉菌に捕食されるだけの存在」
「…いつか、改善するかも知れないじゃないですか」
「…残念ながら、それはない。
それが、何故だか分かるか？
一番の問題は、善玉菌が悪玉菌を食べることがないという事なのさ」

意味が分からない。
そう言うと、
「出来るだけソフトに伝えるために、菌で例えてたんだけどな…」
と、前置きをした上で、言った。

「悪人が人を殺せば、いずれ悪人だけの世界になる。
なにせ、善人は人を殺さないのだから」

あまりにも直接的な表現に、言葉を失う。
「…更正とかは？」と、聞くと、「…フン」と、鼻で笑われた。

「まあ、残念ながらあの世界は、将棋ではなく、チェスってことさ」

#06　刻血の悪夢　（前）

夜。

鳩なのか、フクロウなのか、よく分からない鳥の鳴き声を聞きながら、私は天井を見ている。
天井には、木の悪戯によって出来た顔。
笑っているのか、泣いているのか、よく分からない女の人の顔。
一人部屋を貰った頃からの顔馴染み。
見馴れた光景、見馴れた天井、見馴れた顔。

私はそっと、その顔に手を伸ばそうとする。
しかし、体がピクリとも動かない。
金縛り。
だけど、何故だか心地良い。

ふと、足下にある、何かの気配に気付く。
しかし、体は動かせず、その何かの確認が出来ない。
やがて、それはずるずると這うように私の体を上ってくる。
不思議と重さは無い。

カーテンが、いつの間にか開いている。
空には、よどんだ満月。
その月明かりに照らされて、その何かの正体が分かる。

甚平姿の男。

私は、この男を知っている。

男は、私の耳元に顔を近付け、何かを囁く。
男の荒い息遣いが、首筋に吹きかかってくる。
それに合わせるかのように、私の息遣いも徐々に荒くなっていく。
何故か、官能的な気分。

男の手が私の体を這いずりまわり、私の上着に手をかけた。
そして、ゆっくりと、ボタンを外していく。
一つずつ、一つずつ。
その度に、私の鼓動は早くなっていく。

いや…。
いやだ…。
こんなの…いやだ…。

…やめて。
…やめてっ。

「やめて！」

透明な薄い膜のようなモノが上がり、私はベッドから飛び起きた。
呼吸が荒い。
額からは、汗が止めどなく流れてくる。

見渡せば、夢に出てきた私の部屋。
しかし、カーテンは閉まっている。
誰かの気配も無い。

「夢…また、あの夢」

私は、ホッと胸を撫で下ろすと、足を抱え込んで震えた。

あの夢を見たのは、これで三度目。
夢は、徐々に濃く、長くなっていく。
最初にこの夢を見たのは、いつだったか…。
…あの人を、助けてからのような気がする。

そんな事を考え、すぐに後悔する。
あの人を家に招き入れたのは、私自身の提案だ。
今更、何を疑うというのだろうか。

私は、疑心と不安を取り払うため、窓に近寄ると、カーテンと共に窓を勢い良く開け放った。
まだ冷たい春の風が、私の体を吹き抜けていく。
外に見える中庭では、祖父がいつものように盆栽の手入れをしている。
心地よい風と、ごく日常の光景が、私を安心させてくれる。

「あれは夢…。気にしては駄目」

私は、そう自分に言い聞かせ、肺に溜まったモノをフ～と吐き出した。

一呼吸おいて、時計を見る。
時刻は、すでに朝の7時を回っている。
でも、今日は日曜日。
焦る必要はない。

私服に着替え、朝食に向かっていると、後ろからドタドタと廊下を走る音が聞こえてきた。

「おはよう、お姉ちゃん！」

下の妹のトモミが、寝起きなんかモノともしないで、私の横を元気良く駆け抜けていく。
やっぱり、小学生は元気だ。

「廊下は、走っちゃだめよ！」と、一応、注意していると、洗面所から声が聞こえてきた。

「トモ！ご飯は、顔を洗ってから！」
「はい、は～い！」

洗面所をすでに通り過ぎていたトモミは、そのまま後ろ走りで洗面所へと駆け込んでいく。
やっぱり、小学生は元気だ…。

トモミに続き洗面所に入ると、上の妹のサエがトモミに洗顔指導をしていた。
トモミは、性格が母親似の元気っ子で、少しズボラなところがあり、時々、顔に色んな物を引っつけて食卓につく。
それを見兼ねたサエが、トモミの生活指導をしているのだ。

「トモも女の子なんだから、少しは気にしなさい」

普段は大人しいサエだが、妹をしっかりと躾けているその姿は、私なんかよりもしっかりしたお姉ちゃんだ。
姉として、誇らしい。
ただ、責任感があるゆえに、色んな悩みを抱え込むのが少し心配なのだが…。

そんな事を考えていると、サエが急に私の顔を覗き込んできた。

「…お姉ちゃん、顔色良くないよ？」

「え…？…あ、うん。

最近、よく眠れなくて…」

夢のことは、伏せておいた。

姉の私まで、サエに負担をかける訳にはいかない。

そんなことを考え、私も抱え込むタイプなんだと気付き、自嘲する。

「大丈夫？」と心配するサエに、「大丈夫！」と笑顔で返す。

それでもまだ心配している様子だったが、「先に行ってて」と、トモミと共に食卓へと送り出した。

一息つき、鏡を見る。

そこにはやはり、少しヤツれた顔が映っていた。

いけない…。

あの夢を見るようになったのは、あの人が来てからだ。

もし、この顔の原因があの人にあると思われると、あの人はこの家から追い出されてしまうかもしれない。

そもそも、うちの大人達は反対だったんだ。

躊躇なく、彼を追い出すことだろう。

「マナちゃんの思うようにしなさい」…か

唯一賛成してくれた、祖母の言葉を思い出す。

そう、私は自分の思うようにしただけ。

間違ったことはしていない。

そう自分に言い聞かせ、私は水道から出る水を顔にかぶるのだった。

「おはよう、マナカ」

食卓に着くと、母がすでに朝食を並べ終えていた。
祖父、サエ、トモミも、自分の席についている。
私もすぐに自分の席につくと、２つ空席があることに気付いた。

「あれ？お父さんは？」
「休日出勤だって。
せっかくの日曜日なのにねえ」

「へえ、大変だね」と、頷いていると、トモミが突然テーブルをドンと叩いた。

「仕事と私、どっちが大事なの！」
「トモ…それ、ちょっと使い方が違う気が…」
「ハッハッハッ！
トモミ、今日は爺ちゃんと、どっか行くか？」

食卓を、笑い声が包み込む。
そんな、ごく普通の朝の光景。
表面上ではそう見えるが、言葉に言い表せない、気まずさとも言える空気が、わずかに食卓内に立ち込めていた。

「ねえ。そんな事より、早く食べようよぉ。
お腹すいたよぉ」

トモミの催促に、賑わっていた食卓は、一瞬で静まり返る。

そして、みんなの視線は、縁側へと集まる。
そこには、お古の甚平に身を包まれた彼が、仏頂面で座っていた。

「…」

あの人…。
我が家に居候することになった彼は、まだ口を聞いてくれない。

母が、様子を伺うようにして、彼に声をかける。

「あの～、朝食の準備が出来ましたよ…」
「…」

だが、彼はやはり答えてくれない。
祖父も咳払いをし、席につくよう促す。

「…」

それでも、反応しない彼に、祖父はしだいに苛立ち始める。

そんな険悪な雰囲気を察したのか、母が、
「お、お腹すいてないみたいだし、先に頂いちゃいましょう！
ね？お父さん」
と、取り繕うと、祖父はムスっとしながらも手を合わせた。
どうやら、黙認してくれたらしい。

…これで、このやりとりは5度目になる。

「今日で、3日目ですよ…」

食事を終えた私は、お盆を手に、縁側に座る彼の隣りに腰掛けた。
彼は、3日間食べ物を口にしていない。
口を聞かず、ご飯も食べず、私達を見ようともしない。
見た目も、3日前よりずいぶん衰弱したように見える。

このままでは、きっと倒れてしまう。
そう思った私は、朝ご飯の余りで握った少し不格好なおむすびを、彼の横に置いた。

「母のに比べると全然下手ですけど、よろしかったらどうぞ」
「…」

やはり返事をしてくれない彼に、私は一つ溜め息をつく。
仕方がないので、部屋に戻ろうと立ち上がったその時、彼が初めて口を開いた。

「なぜ、オレを助けた？」
「え…」

今度は、私が黙ってしまう。

「なぜって…」

あの日の朝。
そう、高校2年になっての初めての登校日。
気まぐれで遠回りした海岸沿いの道で、私は彼と出会った。

彼は、まだ冷たい海の中で、気を失い荒波に揉まれていた。

（マナちゃん。

今日、もし何かあったら、自分の思うようにしなさい）

出掛ける前に祖母に言われたその一言が、私を後押ししていたのかもしれない。

気付いたら、私はカバンを投げ捨て、冷たい海に飛び込んでいた。

「…私は、自分の思うようにしただけです」

私が彼を見つめ、そう答えると、彼は、「…いい迷惑だ」と、そっぽを向いた。

「マ～ナカ！」

正門から、聞きなれた声が聞こえてくる。

この声は、幼馴染みの優子の声だ。

そういえば、今日は優子と約束をしてたんだった。

私はそっぽを向く彼に、「友達が来たので」と、会釈すると、正門へと向かう。

その時、屋内から悲鳴にも似た叫び声が聞こえてきた。

「え！？…優子姉っ！？」

食後のまったりモードだったトモミが、天敵の存在を察知したのか、慌て出す。

急いで隠れる場所を探すが、もう間に合わないと思ったのだろう。
トモミは、脱卯の如く逃げ出した。

しかし、すでにこっちに向かっていた優子は、鷹の如き眼力でそれを発見。
ウサギを追う獅子のような速さで、それに追従する。

刹那！

「トモ姫ぇ～、元気か～？」
「ううっ…。
うみゃくしゃぶぇれない、びょうきぃになっらみたうぃ」

あえなく捕まり、頬を引っ張られながら、抱き締められるトモミ。

「そうか、そうか！
可愛いねぇ、トモ姫は」

ほっぺを擦り合わせる優子に、トモミはもはや、されるがままになっている。
抵抗は、無意味だと悟ったらしい。

「…おはようございます、優子さん」

若干、その様子に引きながら、サエがハニカみ優子に会釈をする。

「サエちゃんも、少し見ない間に大きくなったねぇ…。
…胸が」
「…えっ！？」

ああ…、またか…。
優子は可愛い子を見ると、ちょっかいを出したり、セクハラをせずにはいられない性分なのだ。
同級生の美樹という子も、この前餌食になっていた。

「…もう、やめなよ。
サエは、そういうの苦手なんだから」
「むふふ、ごめんねサエちゃん。
むふふふふ…」

未練がましく、サエにセクハラしようとする優子を引っ張り、私の部屋へと連行する。
なおも抵抗する優子を引こずっていると、私達をうるさく思ったのか、縁側の彼と目が合った。
途端に優子の機嫌は悪くになり、彼を睨み付けると、「行こ!」と、逆に私の腕を引っ張り、連行されてしまった。

「マナカは、不安じゃないの?
あんな得体の知れないのと、一緒にいて」

部屋に入るなり、優子はベッドに腰掛け、私に問い掛けた。

「幼馴染みの私が言うのは変かもしれないけど、マナカってかなり美人なんだよ。
…それこそ、女でも見惚れるくらいに…」

何故か、熱っぽい目で私を見る優子。
そんな優子に、私は無言でクッションを投げつける。

「ぶふっ！…じょ、冗談だって。
…でも、本当に危ないよ。
私は、アンタが泣くのを見たくない」

今度は、真剣な顔つきになる。

「それに、許嫁もいるんでしょ？
アンタに悪い虫が付かないよう、クラスで言いふらしてたのに…。
自分から招き入れるなんて…」
「…。
…大丈夫だよ」

根拠の無い言葉だと、自分でもわかっていた。
でも、何故だかその言葉が出ていた。
そんな煮えきらない私の態度に憤慨したのか、優子が私にまくし立てる。

「だから、何でそう言い切れるのかって聞いてるの！
アンタ、アイツに同情でもしてんの？
それだったら、筋違いだよ！
こういうのは、病院と警察にまかせとけばいいの！」
「…私にも分からない。
でも、放って置けないよ」
「…。
…はぁ～」

私の頑固さを知っている優子は、もうそれ以上何も言わなかった。

夕方になっての帰り際。
優子は、彼のいる縁側に真っ直ぐと向かうと、彼の前に立ち、言い

放った。

「マナカになんかしたら、殺すから。
もちろん、サエちゃんやトモ姫にもね」

「…わかってるさ」と、言う彼の言葉に、優子はもう一度確認するように睨みつけると、納得したのか満足げに腕を組んだ。
彼の後ろで母が、「私は？」と、自分を指さしていたが、優子は笑って誤魔化していた。

その夜。

なかなか寝つけなかった私は、2度目の入浴をしていた。
今日も、あの夢を見るかもしれない…。
そんな不安があったからだろう。

夢は、人の心を映すという。
無意識下に潜んだ不安などが、夢として現れるそうだ。
私の場合は、やはり彼…なのだろうか。
納得はいかないものの、徐々に不安が募り出し、急に無防備である事に心細くなった私は、すぐに風呂場から出ることにした。

お風呂から上がると、辺りは妙に静まりかえっていた。
いつもなら、トモミと父が一緒にテレビを見ている時間のはずなのに。

私は、少し戸惑いながらも、自室へと向かう。

その時、奥の方から床の軋む音が聞こえてきた。

人の足音。
それは、どんどんこちらへと近付いてくる。
家族とは明らかに違うリズムに、私の歩みは自然と緩まっていく。
前から、彼が歩いてくる。
暗闇に浮かぶ甚平姿。
＜　トクン　＞
心臓が跳ね、あの夢が脳裏に蘇ってくる。
怖い…。
怖い？なぜ？
きっと、大丈夫。
でも…。
頭の中を、色んな思いが錯綜する。
そうしているうちにも、二人の距離は徐々に縮まっていく。
二人の足音はしだいに大きくなり、やがて私と彼は交差した。
すれ違いざま、無駄だと分かりながらも、心臓の音が聞こえないよう息を止める。
…。
何事もなく、彼は私の横を通り過ぎていった。
緊張が解け、安堵の息が漏れる。
「…おい、どこに行くんだ？」

後ろから急に声をかけられ、背筋がビクッと伸びる。

「どこって、自分の部屋に…」

驚きに震える唇を抑えながら、私は出来るだけ冷静に答えた。

「お前の部屋、そっちじゃないだろ？」

「…え？…あれ？」

気が付くと、私の足は玄関の方に向いていた。

…あれ？

私、なんで玄関に向かっているんだろう。

…もしかして、寝ぼけてた？

自分の家で迷子って…。

羞恥心から顔が見る見る赤くなり、焦った私は慌てて違う話題を振った。

「お、おむすび、部屋に置いてあったの気付きました？

少しは食べないと、体に毒ですよ！」

「…余計なお世話だ」

彼は、フンと鼻を鳴らすと歩いて行ってしまった。

恥ずかしさと後ろめたさで、心が痛い。

私は、自分の軽率さを反省しながら、今度こそ自分の部屋へと向かうのだった。

＜　トクン　＞

ふと、誰かに呼ばれた気がして振り返ると、玄関横の壁に何か光るようなモノが見えた気がした。

次の日の朝。

例の夢を見る事もなく、久しぶりに快眠出来た私は、久しぶりの気持ちいい朝を満喫していた。
そこに、トモミが慌てた様子で飛び込んできた。

「マナカお姉ちゃん、大変！
あのお兄ちゃん、出ていくって！」
「え…？」

私が急いで玄関に駆けつけると、彼はすでに玄関を出て、中庭を横切っていた。
私は、パジャマである事も忘れ、彼の前に立ちはだかる。

「…そこをどけ」
「どきません！」

昨日疑った分際で、出ていこうとしている彼を止めるのは、筋違いだとは分かっている。
でも、このまま放っておいたら、取り返しのつかない事になりそうで…。
私は、ずっと持ってた疑問を、彼にぶつける事にした。

「なぜ、あなたは…」

「なぜ、お前は…」

二人の声が重なり、お互いに黙り込んでしまう。
気まずい沈黙に、話し出すきっかけを探していると、彼が先に私に話しかけてきた。

「…お前の一番大切なモノは何だ？」
「…え？
家族…ですけど」
「そうか。
だったらオレなんかより、その家族を大切にしろ。
オレに関わるな」
「なぜ、あなたは、そこまで人を拒絶するんですか！？」
「…お前は恵まれている。
オレとは一生、相容れない」

彼はそう言うと、私を避け、正門へ向かって歩きだしてしまった。

「…出ていって、どうするんですか？」
「お前には、関係ない」
「そうですか。
言っておきますけど私、あなたに付いていきますから。
好きなように行動しなさいと、祖母に言われてますので」
「…祖母？」
「はい。
家族から許可が出ていますので、どこへでも行けますよ？
さあ、どこに行きますか？」
「…お前、見かけによらず恐いな。
このままオレが出ていけば、オレは女子高生を連れ出した誘拐犯ってことか？」

「未成年略取って、ところですかね」
私は、ニコリと笑い、彼の裾を掴む。
少々強引だったが、この際、手段なんか選ばない。
睨み合う、私と彼。
私の後を追ってきたトモミも、この状況にアワアワしている。
どのくらい、睨み合っただろう。
彼は、急に顔をもたげたかと思うと、下を向いて、「フッ」と、笑った。
「誘拐したってことになると、お前の友達にボコボコにされそうだしな。
…やめとくよ」
「賢明ですね」
私も、ニコリと笑う。
やれやれと、頭を掻きながら屋内に入っていく彼を見送りながら、私はもう一度微笑む。
私にとっては、彼が思い留まってくれた事よりも、一度も笑わなかった彼が、苦笑いとはいえ笑ってくれたことが、何よりも嬉しかった。
夜。
私は、歩いている。
家の中を。

＜　トクン　＞

あれ？私、どうしたんだっけ…？
たしか、彼を引き止めた後、急いで学校に行って…。
学校から帰ってきてから、彼を夕食に誘っても、彼は相変わらずで…。
その後、宿題を…。
そういえば、お風呂に入ったっけ…？入らなきゃ…。
どうでもいい事が、頭に浮かんでは消えていく。

＜　トクン　＞

そうだ…。
背中が、見えたんだ。
甚平を着た男の、後ろ姿が…。
私は、その人の後をついて行って…。

＜　トクン　＞

光っている。
玄関に続く、道の先。
誰かが、私を待っている。
行かなきゃ…。

私は歩く。
誰かの声に、誘われて。
目の前の光は、さらに大きくなっていく。

その時、玄関の扉が開き、彼が家へと入ってきた。
彼は、私を見るなり、私の元へと近付いてくる。
目の前にいるのは、甚平姿の男。
夢の中に出てきた、私を犯そうとした男。

「…ん？どうした？
また、寝ぼけて迷子か？」

彼は、やれやれといった様子で頭を掻いている。
違う…。
この人じゃ無い。

＜　トクン　＞

玄関の横。
何もない、壁があるはずの場所に襖がある。

「？」

彼も私の視線が気になったのか、後ろを振り返るが、何も見えてない様子で首をかしげる。

「おい、どうした？大丈夫か？」

彼が私の顔を、心配そうな顔で覗き込んでくる。

その瞬間、目の前の景色がぐらりと揺れ、平行感覚を失った私は、廊下へと崩れ落ちた。

しかし、倒れた私に待っていたのは、冷たい床ではなく、暖かい胸の中だった。
どうやら、寸前のところで、彼が私を受け止めてくれたらしい。

「おい！どうした！
おい、誰か来てくれ！」

私は彼の声を聞きながら、深い闇へと落ちていく。

…喉が渇く。
…視界が揺れる。
…息苦しい。

誰か助けて…。
助けて…。

ー　ドクンッ　ー

＃０６　刻血の悪夢　（前）（後書き）

＃０６　刻血の悪夢（後）に、続きます。

＃０６　刻血の悪夢　（後）（前書き）

刻血の悪夢（前）の続きです。

#06　刻血の悪夢　（後）

マナカが倒れた…。
あの、お節介女が…。

あの後、オレの声を聞きつけたあいつの家族は、オレ達の元へとすぐに駆けつけてきた。
最初は、オレが何かしたのかと疑っていたようだが、オレの話と、マナカの様子を見るやいなや、急いで奥の部屋へと運び込んでいった。
その妙に手慣れた感じに、何か違和感を憶えた。

それから、数時間。
すっかり夜が明けても、あいつの家族は救急車どころか、医者へ連れていく気配もない。

あいつは、もう目を醒ましたのか？
それとも、家族が救急車を呼ぶのを、ためらっているだけなのか？
業を煮やしたオレは、奥の部屋へと足を踏み入れることにした。

襖を開け室内に入ると、そこには仏壇があり、それに向かって爺さんが熱心に拝んでいた。
どうやら、ここは仏間のようだ。

仏壇の前には、布団が敷かれ、マナカが寝かされている。
マナカのかたわらには、母親と妹達が取り囲むように座っていて、洗面器に張られたお湯とタオルで、マナカの看病をしていた。

オレは、マナカの家族に具合を聞こうと近付く。
次の瞬間、オレはマナカの格好に気付き、慌てて目を背けた。
そこにいたマナカは、布団が剥され、服も乱れ、下着もあらわになっていた。
どうやら、汗を拭いてる最中だったらしい。

オレは急いで離れると、一つ間を置き、マナカの家族に話しかける。

「…なあ、病院連れてったほうが、良いんじゃねえのか？」
「病院行っても、駄目なの…。
呪いのせいだから…」
「ちょっと、トモ！」

のろい…？
慌てて三女を叱る次女の声を聞きながら首を傾げていると、玄関の方からドタドタと廊下を走る音が聞こえてきた。
前にオレを睨み付けてきた女が、今にも泣き出しそうな顔でこっちに向かってくる。
たしか、優子と言ったか。
優子は、入り口に立っているオレを押し退け、マナカの元へと駆け寄っていった。

「あんたは、マナカに近寄らないで！
…お爺ちゃん、婚約者の人には連絡しましたか？
こういう時には、近くで励ます人がいたほうが…」
「…実は先方から、その病弱な体をどうにかしない限り、婚約の件は保留だと…」
「なっ！？
…大事な時にいないで、何が婚約者だ！」

ドンと、力いっぱい畳を叩くような音が聞こえ、やがて、それはすすり泣きに変わる。

「ううっ…マナカ…マナカ…」

…おいおい。
こいつらは、いつまでこうしてるんだ？
嘆くだけで、ウジウジウジウジしやがって…。
本当にこいつらは、マナカの事を大切に思ってるのか？
その状況にイラついたオレは、自分の感情を思わず口に出していた。

「嘆くだけじゃあ、何もやってないのと一緒だ」
「…っ！」

その言葉に反応し、優子がオレを睨みつける。

「アンタに、何がわかんのよ！
子供の頃から病弱で、何度も死にそうになってて。
病院で診てもらっても、原因が判らないって言われて…。
急に元気になったかと思えば、今回みたいに急に意識を失って…。
私は、何も出来なくて…。
助けられるなら、助けたいわよ…」

涙ながらの訴えにバツが悪くなるオレに、優子はさらに畳み掛けてくる。

「マナカは、アンタの命を助けたんでしょ！
この子、アンタのために一生懸命頑張ったんだよ！？

見ず知らずの、アンタのために！
そのおかげで、助かったくせに！
今度は、アンタがマナカを助けなさいよ！
…助けてよ！」

「別に、助けてくれと言った訳じゃない…」、という、大人気ない言葉が頭に浮かび上がった次の瞬間、優子は、さらに大きな声で叫んだ。

「マナカの唇も奪ったくせに！」

突き刺さる、まわりの視線。
「あれは、人口呼吸で…」とか、「そもそも、マナカから…」とか、言い訳しても、収まりそうにない。
結局、その一言で居心地が悪くなったオレは、自分にあてられた部屋へとさっさと退散することにした。

部屋に戻ると、オレはすぐに寝転び、天井を仰いだ。
頭の中には、自然とマナカの事が浮かび上がってくる。

「死なないで！」
溺れていたオレに、そう叫びながら救命措置をしているマナカ。

「うちに少しの間だけでも、泊めてあげられないかな？
この人、身寄りが無いみたいだし」
見ず知らずのオレを、自宅に招き入れてくれたマナカ。

見ず知らずのオレに、なんであそこまで…。
アイツは何なんだ？お人好しか？

見ず知らずの男を入れるなんて、世間知らずの馬鹿がやることだ。
…ったく。

昨日から、一睡もしてなかったオレは、一眠りしようと目を閉じる。
その瞬間、あの声が頭の中に蘇ってきた。

「マナちゃんのそばに居てあげて」

そういえば、意識が朦朧としていた時に聞こえてきたあの声。
あの声は一体、何だったんだ。

…。

（マナちゃんのそばに居てあげて）
（今度は、アンタがマナカを助けなさいよ！）

…どいつもこいつも、勝手なことばかり言いやがって。
大体、医者に診せて直らないものを、どうやって直せっていうんだ。

（病院行っても、駄目なの…。呪いのせいだから…）

「…。
呪い…か」

オレは目を開け、考え込む。

そういえば、三女が言っていたあの言葉。
あれは、本当のことなのか？
確かに、あの次女の慌てかたは普通じゃなかった。
もしかしたら、家族以外に知られてはいけない、タブーのようなモ

ノだったのかもしれない。

呪い…か。

普通の人に言っても、変人扱いされる、非現実的な言葉。
呪われた人の人生、その末代までにも影響を及ぼす、因果の始まりの言葉。
そして、オレの人生につきまとった言葉。

オレは、ボーッとしながら、寝返りをうつ。

その目線の先には、台があり、その上に小さな皿が見えた。
皿の上には、マナカが握ったおむすびが置いてある。

「…」

オレは、しばらくおむすびを見詰め、黙って立ち上がると、部屋を後にした。

「爺さん。
マナカの呪いってのは何だ？」

オレは、爺さんの部屋に訪れるなり、単刀直入に聞いてみた。
その言葉に、ピクリと反応し、顔を上げる爺さん。
そして、少し考え込む様子を見せた後、今読んでいたであろう書物を、黙ってオレに差し出してきた。

渡された書物には、何かの名前と、小難しい文章が達筆で綴られていた。

どうやら、何かの資料集らしい。
開かれたページには、『奉公人なめくじ』と太字で書かれていて、
その下には＜未達＞と記されている。

「それは、わしらの先祖が戦ってきた歴史じゃ。
水無瀬家に続く、長き因果との…。
最初に太字で書かれてあるのが呪いの名。
その下に書いてあるのが、呪いを破ることに成功した数じゃ」

他のページを見てみると、確かに呪いの名の下に、玉（正）の字で数が記されていた。

「破った数って…。
呪いってもんは、一回破ればそれで終わりなんじゃないのか？」
「その代ではな…。
呪いは、潜伏期間を終えたのち、再発する」

それなら、永遠に逃れられないじゃないか。
と、口から出そうになるが、爺さんのあまりの憔悴っぷりに口ごもってしまう。

改めて、本に目を落とす。

「未達…未達成。
成功例は無いということか」

続きには、呪いについての説明が書かれているようだった。
読み難いミミズのような文字を、頑張って読み進める。

簡単にまとめると、そこには、このような事が書かれてあった。

奉公人なめくじ

かつて、水無瀬家に奉公人として雇われた男。
男は、汗をよくかき、かっぷくがよかったため、他の奉公人に『なめくじら』と揶揄されていた。
そんな彼に、分け隔てなく接してくれた水無瀬家の妻。
いつしか、彼は彼女に恋をした。
しかし、相手は人の妻。
叶うはずの無い恋だった。

日に日に募る、彼女への思い。
とうとう彼は、彼女の寝込みを襲ってしまう。
だが、悲鳴を聞きつけた旦那により、刀で返り討ちにされてしまった。

その時の刀傷で、彼は視力を失った。
視力を失い、地を這いずるように移動する様は、ますますなめくじを彷彿とさせたらしい。

その先に男を待っていたのは、深い絶望だった。
奉公人をやめさせられ、水無瀬家の妻には塩を投げつけられ、彼は全てにおいて光を失った。
暗い闇の中で、憎悪と嫉妬を口にする日々。
そこを、狂姫（くるいひめ）の呪いに取り込まれた。

「狂姫？」
「…わしらの因果の大本（おおもと）じゃ」

「…因果」
「わしらの家系は呪われとって、望まなくとも少なからず霊能力を授かっておる。
その力は男より女、特に長女が強く、中には凄まじい力を持った者も現れる。
しかし、所詮は呪いで得た力。
薬にもなるが、毒にもなる。
大きな力を持つ者ほど、憑依体質になる上に、呪いで命も削られる」
「…何故、長女が一番強いんだ？」
「…狂姫の呪いを、直接受けるからじゃ…。
…水無瀬家の長女は、狂姫の百の呪いを身に受け…二十歳まで生きられん」
「…！？
…アイツ、今何歳だ？」
「十六…もうじき、十七になる。
もう、いつ呪い殺されてもおかしくない…」

言葉が、出なかった。

あいつが死ぬ？
あの、お人好しが？
突然の言葉に、オレの頭の中は思考停止する。

「…呪いが現れた時、意識を失うのだけは救いじゃが…」

爺さんは、頭をかかえ、うなだれる。

「…なあ、爺さん。
マナカはその事、知ってるのか？」

「言える訳がなかろうが！
…今までも、病気と言って誤魔化してきた」

そう言うと、小さな台に置いてあった写真立てを、オレの前まで持ってきた。
入っている写真は古い物で、８人の大家族が仲良さげに写っている。
その中にいた、少しマナカに似た美しい少女を、指でなぞりながら爺さんは言った。

「わしの娘…マナカの伯母にあたる美鈴は、感の良い子で、わしらが何を言わんでも長女の呪いのことに気付いとった。
最初は、抗おうとしていたようじゃったが、知れば知るほど、呪いの恐ろしさに気付いたんじゃろう。
その後の姿は、目もあてられんかった…。
それを知ってるからこそ、マナカには隠しとったんじゃが…。
…今回だけは、気付いてるやもしれんなぁ…」

とうとう爺さんは写真にすがりつき、おいおいと泣き出してしまった。
オレは、かける言葉が見つからず、ただただ、爺さんを眺めているだけだった。

その後、オレは爺さんに連れられ、マナカのいる仏間へと向かった。
「もう、見守る事しか出来ないから」と、爺さんは言っていた。

マナカは、唸されていた。
汗と涙に身悶えながら。

仏間には、すでに家族が全員揃い、マナカを取り囲むように座って

いる。

「なめくじは夢に現れ、徐々に精神を侵食し、最後には自分の作った巣に誘い込む。
己の嫁にするために…。
…発覚が遅れてしもうたのは、呪いの事を隠しとったのが、いけんかったのかもしれんなぁ…」

爺さんが、力無くへたり込む。

「…お父さん。
自分を責めちゃ駄目よ…。
これで良かったの。
…姉の時のように、毎日震えて過ごす姿は見たくないもの」

マナカの母も、涙を目に溜め、マナカの頭をさすっている。

「なめくじの嫁に行かせぬよう、許嫁まで立てたのに回避出来なかった。
…これが、運命なのか」

部屋の隅っこで、オカルト関連の書物に埋もれながら、マナカの父がうなだれている。

「お姉ちゃん、死んじゃだめ…。
私が…、私が…絶対…」

次女が、マナカの手を握って、何事か呟いている。

「…グズッ……」

三女も、泣きはらした顔をして、マナカに寄り添って寝ている。
みんな目を伏せ、悔しそうに顔を歪ませている。
聞こえてくるのは、時計のコチコチという音だけ。
誰も、喋ろうとしない。
その様子はまるで、マナカを看取るために集まっているかのようだった。

おい…。

なぜ、そんな目をする…。

なぜ、諦めようとする…。

大切な人間なんだろ？

マナカも、あんたらが…家族が、大切だって言ってたぞ？

運命を受け入れる？

そんなもん…。

そんなもん…。

諦めた人間の、言い訳だっ！

オレは、近くにあった壁を力いっぱい殴りつけると、叫んだ。

「アンタ達には、覚悟が足りない！
どうしようも出来ない状況に、心のどこかで諦めている！
誰かを助けようと思うなら、絶望も、無力への悔恨も、良心の呵責も邪魔なだけだ！」

オレは、家族達を押し退け、唸されているマナカに近寄ると叫んだ。

「マナカ！起きてるか！」

軽く揺さぶると、唸されていたマナカが、ゆっくりと虚ろな目を開ける。

「俺がお前を守る！お前を助ける！」
「マ…モ？タス…ケ…？」

消えいりそうな声で、マナカはオレの声に反応する。

「約束だ！」
「ヤ…クソク？」
「ああ！」

オレは、渾身の力を込めて、頷いた。

次の日の朝。

２４時間営業のスーパーの前。
少し固くなったおむすびを頬張りながら、オレは誰かを待っている。
スーパーの向かいにある公園には、遅咲きの桜が満開になっている。

「花見のシーズンか…」

今年の桜は、綺麗だ。
マナカが起きたら、見せてやろう。

そんな美しい春の朝を、汚い下品な喋り声が掻き消す。

「まぢうけるぅ〜、ギャハハ！」

朝帰りなのか、高そうなのにヨレヨレになった服をまとい、品の無い女が3人歩いてくる。

こいつらがいい。
オレは、おむすびを一気に口に放り込むと、その3人組に向かって歩き出した。

すれ違いざま…。

「イテッ！？
何すんだよ！オッサン！！」
「…ん？
どうかなされましたか？お嬢さん」
「しらばっくれるんじゃねえよ！
今、私の髪の毛抜いただろうが！」
「おっと、失礼！
どうやら、指に髪の毛が引っかかってしまったようだ。
どうか、これでお許し下さい」

オレは、内ポケットから二千円札を取り出し、女の目の前でヒラヒラとさせる。

「足りねえよ！
万札寄こせよ。万札」
「…じゃあ、いいや。この二千円も無しな。
詫びの印だと思って、くれてやろうと思ったんだけどな…残念だ」
しまおうと二千円札を折り畳んでいると、女はチッと舌打ちをし、引ったくるようにして、それを奪っていった。
コチラを睨みながらスーパーに入っていく女達を、オレは手をヒラヒラとさせながら見送る。
「ホント、すいませんでしたねえ～」
これでいい。
オレは、あの女の髪の毛を大事に包み、家路へと急いだ。

家に帰り、オレは部屋に閉じこもると、最後の仕上げに取り掛かる。
手に握っているのは、キシキシに傷んだ髪の毛。
それを、あらかじめ用意していた大きめの人形に入れ込む。
二千円の命…。
オレはあの女を、マナカの身変わりにしようとしている。
呪い移し。
長く続く呪いの歴史の中で、恐らく誰かが思いつき、躊躇した回避方法。
なめくじは、目が見えない。

奴にあるモノは、嗅覚、触角、聴覚だけだ。
それならば、この人形を、マナカだと思い込ませればいい。

この人形は、『人のふりをする人形』といって、少しの間だけ、髪の毛の持ち主のように振る舞い続ける。
体臭、仕草、声、全てを真似する事ができ、姿以外は完全に本人だ。
触れられない限り、奴に気付かれる事はない。

段取りはこうだ。

まず、なめくじが、マナカを巣に誘い込むタイミングを待つ。
そして、その時が来たら、誘い込まれる前にマナカを止め、変わりに人形を巣の中に放り込む。
自分が誘い込んだところに人間が入ってくれば、奴はマナカが来たと思い込むことだろう。
その後は、効果が無くなる前に人形を上手く誘導し、あの女となめくじを接触させれば、呪い移しが完了する。

…自分の非道っぷりに、反吐が出る。
だが、半端な覚悟じゃ、誰も守れやしない。
オレは、鬼となる覚悟をし、夜を待った。

月が、にじんでいた。
フクロウが、警戒しろと鳴いていた。

「嫌な夜だ」

玄関が見える位置に待機して、数時間。
オレは集中力を切らさぬよう、注意しながら見張り続けていた。

今日が、その日だとは限らない。
だが、オレは何日でも見張り続ける覚悟だった。

何時間、経っただろうか。
突然、奥の方から、ペタペタと足音が聞こえてきた。

マナカだ。

マナカは、心ここにあらずといった様子で玄関に向かって歩いていく。
マナカの看病をしていた家族は、どうしたのだろうか。
何かの力で、眠らされでもしてるのだろうか。

「ふふっ。まるで、かぐや姫だな」

何故だか可笑しくなって、笑ってしまった。

だが、残念ながら、今回勝つのは帝(みかど)だ。
マナカを、連れていかせやしない。

その時だった。
玄関横の壁が、うっすらと光りだす。
それは、マナカが近付くにつれて、形を成し、襖らしきものに変わっていった。
どうやら、これが爺さんの言っていた、巣というやつらしい。
やはり、今日が当たりの日だったようだ。

そろそろだな…。
オレは、軽口を叩きながら、マナカの前に飛び出す。

「よう、マナカ。
…って、聞こえちゃいないか」

虚ろな目で、立ち止まるマナカ。
オレは、そんなマナカを真っ直ぐと見つめる。

こいつは…。
例え、今回助かったとしても、呪いに蝕まれ続ける。

それは大人になるまで続き、多くの者が…。
いや、全ての者が、大人になるまでに…死ぬ。
本人の、気付かぬままに…。
それが、水無瀬家長女に課せられた因果。

「マナカ…」

「…」

「約束は守る。
お前は一応、オレの命の恩人だからな。
…まあ、感謝はしてないが」

「…」

「…呪いが百あるなら、その都度、お前を守ってやる。
例え、どんな方法を使ってでも…。
…どんな罪を犯したとしても」

「…」

「…そして、オレはお前に嫌われ続ける。
オレは、罪人(つみびと)だから。
慕われるべき人間じゃないから」

「…」

「それでもオレは、お前と…お前の大事な人達を守り続けたい。
お前が、そばにいる事を許してくれる限り」

「…」

はらはらと…。
虚ろな目から、はらはらと涙がこぼれ落ち、マナカの唇がわずかに動く。

「…シナナイデ」

「…。
別に、死ぬ気はねえよ。
…寧ろ、オレは今から人を…」

「…シナナイデ」

「…」

こいつは…。
こいつは…こんな状態になっても、人の心配か。

「…オレは…」

人形を見詰め、オレは固く目を閉じる。

「…」

そして、ある決意を固め、目を開くと、マナカの変わりに襖に近寄った。

さあ、出てこいなめくじ。
オレが、お前の欲しいモノをくれてやる。

襖が、開いていく。

オレが手に握っている人形が動きだす。

眩い閃光の中で…。

オレは…。

ー　ハラリ　ー

頬に、桜の花びらが舞い落ちる。

窓が、いつの間にか開いている。
天井には、いつもの顔。

私がねむるベッドのかたわらには、サエが心配そうな顔をして座っている。
私は、自分の置かれている状況を確認すると、サエに問いかけた。

「…私…また、倒れたの？
…でも少し、いつもとは…」
思い出せるのは、光る襖と、私を抱きかかえるあの人の顔。
そして、深い闇の中に沈んでいく感覚。

「…あのね。
お姉ちゃん、幽霊に憑依されて気を失っちゃったの…」
「…私が憑依？
…ああ、だからあんな夢を…」
幽霊に取り憑かれたのは、初めてだった。
妹達が取り憑かれているのは見てきたが、霊感無しの私にも取り憑くとは思わなかった。
でも、案外実感が湧かないモノなんだな、とも思った。

「それでね、実はね…」
サエの話だと、私に取り憑いた幽霊はとても厄介なモノで、家族はとても手を焼いたらしい。
どんな方法を使っても払うことが出来ず、みんな失意に打ちひしがれていた。
だが、そこを彼が助けてくれたそうだ。
「だからね、あの人、お姉ちゃんの恩人なんだよ」
「…そっか」
私は、天井を見上げると、彼を思い浮かべニコリと微笑んだ。

それから、一日経ち、体力がすっかり回復すると、私は久しぶりに外の空気を吸おうと外に出た。

彼は、いつも通り、縁側に座っていた。
拳と腕には包帯を巻き、頬には痣が出来ている。

私は、彼に近寄ると問い掛けた。

「なんで、私を助けたんですか？」

彼は少しこちらを見ると、空を見上げながらこう答えた。

「…オレは、オレの思うようにしただけさ」

私の心に、春のような暖かな風が流れ込んだような気がした。
やっぱり、この人は優しい人。
私は、お礼を言おうと、頭を下げる。

「ありが…「それよりさ…」

お礼の言葉を遮られる。
きょとんとしていると、彼が真顔で続けた。

「見た目によらず、可愛いの履いてんだな」
「…？何の話ですか」

突然の言葉に、私は困惑する。

「でも、水色ってのは、どうなんだろうな。

もう春って言っても、朝方は冷えるし」

水色？履いてる？
それに、冷える？
…水色で履いてるって…まさか。

私が寝込んでいたのは、３日間だそうだ。
その３日間は、お風呂に入れなかった。
その間は、母や妹達が、部屋で体を拭いていてくれてたらしい。

まさか…。
まさか…。
その時に、見て…た？

「な、何を…」

私は頬を引きつらせながら、彼を見詰める。

「知ってるか？
色っていうのは、人の体温にも影響を与えてるらしいぞ。
赤系統は体温を高くし、青系統は体温を低くするって具合に。
だから、水色よりはピンク系統の方が寒い時期…」
「…もういい」

怒りに震える唇で、私は居候の言葉を遮る。

「ん？何、怒ってんだよ？」

無神経な物言いに、感謝の気持ちが吹き飛んだ。

「この、変態居候！
…大っ嫌い！」

そう言った私に、何故か彼はニコリと微笑んだ。

＃０６　刻血の悪夢　（後）（後書き）

水無瀬家因果と居候　第一部　完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8721s/

水無瀬家因果と居候

2011年11月24日20時45分発行